

永遠なる愛に
生かされて

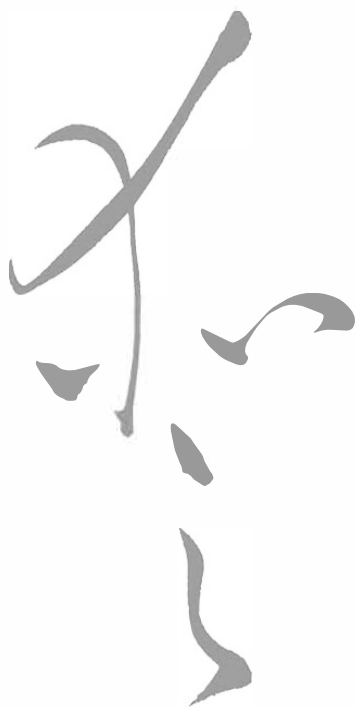
——意識革命と天変地異

榎木玲子



永遠^{とわ}なる愛に生かされて
—— 意識革命と天変地異

榎木玲子



意識革命と天変地異	4
母と神の愛に導かれ誕生	9
そろばん塾と優勝カップ	12
中学生・高校生	14
認知問題	18
進学か就職か	22
交通事故	25
母、家を新築する	30
あこがれの結婚へ	31
新生活の始まり	35
障害児の秀ちゃん	38
秀行の死	44
三男の誕生	47
教室の指導者としての仕事	50
教室は不思議なところですよ	52
最愛の母の死	54
平成十七年一月十七日 朝五時四十五分	58

意識の世界への門	62
神の子の道	63
再び、意識改革の道へ	67
田池留吉って何者？	69
閉めたお仏壇	72
入院中の伯父との再会	74
終戦五十年悲しみの叫び	76
(心の旅路) 意識革命から意識の転回へ	93
肉体細胞からの思い	96
墓じまい	102
終わりに	104
付 “幼き御魂よやすらかに眠れ”	
「幸福」	110
秀行の生の証	111
秀ちゃんへ	116
子供は、皆の共有物	119

意識革命と天変地異

コロナウイルス感染者（世界五三二万七〇八五人）

コロナウイルス死者（世界三四万二三九三人）

二〇二〇年五月二十五日朝刊から

ここ数力月、世界中を騒がし経済界をどん底に突き落とし、今なお子供たちは学校に行けない。そんな大混乱のニュースが連日テレビで放映されている。南海トラフ大地震。この三十年間のうちに必ず起こる。それは今日かも知れない、明日かも知れない。いや何時間後かも知れないのだと……

天変地異の真つただ中に入ろうとしている地球。

ここ数年の台風、洪水、山崩れ、津波など考えられない想定外の自然災害が起

阪神・淡路大震災

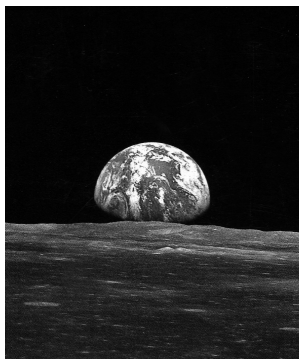


1995

阪神淡路大震災 (1995 年 1 月 17 日)

不評など、世間はいろんな議論が横行している。会社での勤務を中止させ家庭でのテレワークの時代になった。私の塾も今日の地区会は、オンラインでのミーティングだった。(指導者仲間二十五人)

こり始めた。「怖い！」そんな恐怖の心を増長するかのうに今年に入つて、世界中を震撼させたコロナウィルスの襲撃。人々をパニックに陥れたウィルス。今日、やっと緊急事態制限が解除され、自粛、自粛から出口に向つて歩き出そうとしている。宣言解除しても大丈夫なのか、大阪は三日間、感染者ゼロ。でもアメリカは感染者^{かんせんしや}一七二万人、死者一〇万人、ブラジルでは、毎日八〇〇人余りの死者が出るという。これから第二波、三波が来れば、どうなるかまだ模索中。一人一〇万円の支援金。あべのマスクの



月から見た地球（アポロ 11 号）

スカイプやズームなど聞きなれない言葉が頭の中を通過していく。付いていくのに必死だ。ウイルス感染を防止するために都会から人が消えた。自粛により経済も滞り失業者や、倒産が増えた。誰がこんな世界が来るなんて想像しただろう。平凡な日常ふとひきつけられた新聞の募集記事。「自分史」だった。淡々と過ぎて行く人生の締めくくりに最後の言葉を残して行けたら。天と地が引っくり返るような心の体験を語っておきたい。今では常識とされている「地動説」

（地球は太陽の周りをまわっている。）と唱えたコペルニクスやガリレオ。

太陽は、平たい地球の左から出て右に落ちることを繰り返していた天動説を覆した。この「コペルニクスの転回」を学び始めたのだった。

「私たちは意識です。心です。」

私たちが目にしているこの世界は本物の世界では無い。泡と消え、幻と消えて行く影の世界。私たちの心が作り上げた偽の姿。

この地球は人類が出した汚れたエネルギーによりあと三〇〇年で滅亡し、四次元へと移行する。肉体は滅んでも、心は、意識は永遠に生き続けます。

現世は「田池留吉」が、日本に生まれた指導者で、二五〇年後はアルバートが今のアメリカとは程遠い姿のアメリカに指導者として誕生します。そして三〇〇年後に皆で四次元の世界に移行。

「田池留吉・アルバート磁場反転」と思い、何も考えずに瞑想することを日課にすること。思いの世界なのでいつも喜んで、過ごしなさい。頭をくるくる使わずにありのままの自分になって生きること。

この学びに出会ってから私は、また再出発です。朝の目覚めが幸せです。

犬のクッキーと散歩に出て、その後の新聞と番組表で、テレビの见たい番組を予約し、夜にはそのテレビを見ながら就寝。今は塾も自粛でお休み。



琵琶湖牧野にて

自分で行けないアルプスや遠い山々。
世界遺産にもドローンで撮影した映像が
映されて行ってきた気分になれる。本当
にありがたい時代になりました。

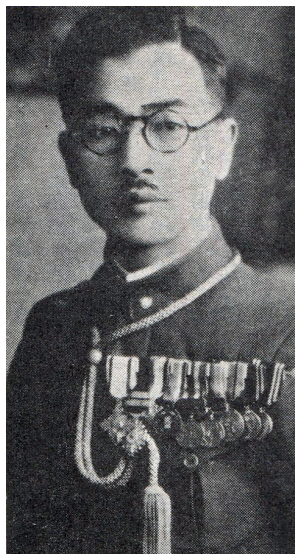
生まれて七〇年、光陰矢のごとし、早
いものです。

両親、伯父、おば、兄弟、子供、従兄弟、
親友、友人、知人とみんな亡くなってい
ました。

人間は生まれるのも一人、死ぬのも一
人。でも心の中に田池留吉が居る。

その田池留吉と共にこれから安らぎの
世界を覗きに行きましょう。

母と神の愛に導かれ誕生



お父さん

「オギヤー！」元気な声で私はこの世に生まれ出た。

産婆さんの手助けと優しい母の安堵した顔が浮かぶ。やわらかな母の胸に抱かれ全てを委ねたまだ目も見えない赤子。この

愛の中に誕生した喜びだけを胸一杯に膨らませていたであろう私だった。

あれから七十一年が過ぎ去った。子供の頃と違い、四十になると時は足早に過ぎて行く……。このたび自分史の応募をすることで人生を振り返る機会を得たことに感謝します。

私が誕生した時、母は三十五歳、父は四十三歳。

満州事変後の引き上げ船の中で知り合ったそうだ。

母は大連病院の看護婦、父は当時、政治家たちと関わっていて、中国皇帝から直筆の掛け軸も頂いたことがあったという。きんしんしょう金鶏勲章も受章し、地位や名誉を重んじる人間だった。



れい子 1歳 1か月

母は職業柄、人に親切、困ってる人にはすぐに助けに行く人だった。帰国後、数年して妊娠した母に、「子供はいらん。おろせ」の一言だけだった、父にはすでに五人の子供たちが居たから……。

三十五歳になって初めての妊娠、そして出産。「この子は私が育てます。」と言いきった母は、そのころ小学校の養護教員になっていた。そして父はお国の電通技師として

勤務していた。母の堅い決心が無かったら私の今は無かっただろう……。

中学生になった私は、母を幸せにするんだという責任の重圧に今までと違った屈託のない性格から少し大人びた考えを持つようになった。

「明るくて誰その区別なく、いつも友人と仲良く集っていますよ。他の子供さんのお母さんもれい子さんと友達になったことを喜んでいます。複雑な家庭事情があるとは、考えられませんでした。」



お母さんとお揃いの手製
ワンピース れい子3歳



れい子5歳1カ月

いつも成績ではクラスのトップ。その座は、居心地が良かった。毎年一学期は学級委員に選出され、運動面ではリレーの選手。テストの私の答案は、先生の解答書として使用される。個人懇談で母の喜んだ顔を見るのが唯一の喜びだった。

そろばん塾と優勝カップ

四年生から六年生まで近所のそろばん教室に通った。その三年間で会議所の一級、全珠連の初段まで合格した。小学生の私には商業計算の応用問題は難しく感じた。布袋？ そんな言葉も始めて耳にする中、ゲーム感覚で合格。一度も不合格なしで小学生を通過した。

そろばん学校での思い出は、今の私の教室につながる。あの頃四時から始まる教室の前は、子供達でいっぱいだった。始まるまでの間、いろんな事をして遊ん



母と私（小学校1年生）

だ。違った学年の子供たちで馬乗り
をしたりケンパをしたり、ワイワイ
ガヤガヤの仲間たち、楽しかったな
あ……。

中学生から卒業旅行のお土産をラ
ブレターと共にプレゼントされた時、
血が上るとはこのことなのか、真っ

赤になって胸がドキドキした初恋の思い出。

地方の競技会にも数回出席した。

その協議会で五科目（かけ、割り、見取、暗算、伝票）の合計が五〇〇点満点
で優勝したことがあった。大勢が見つめる講堂の壇上から席に戻るまでの間、動
揺してしまい何回も優勝カップを落としてしまった。体の震えを止められなかつ
た嫌な恥ずかしい思い出。

その後、大阪大会に成績の良かった各教室の三人が選ばれて臨んだ。その練習先は、昔、他市のそろばん塾があったところ。住みだしてから思いだしたけれど、そこは娘の住居にと新築を建てた土地だった。人はやはり何かの縁で導かれていたのだろう。

学生の間は、勉強らしいことはせずに遊びまわっていた。自転車でそこらじゅうを走った。帰宅すれば母が借りてきた図書館の本を読んで過ごした。テレビはまだ我が家には無かった。退屈もせずに時間が過ぎて行く。（隣には従兄妹たちが四人住んでいた。）犬も飼い始めた。初代のメリーだ。

中学生・高校生

中学生になってから、定期テスト、実力テスト、クラブ、生徒会活動など忙し

くなってきた。勉強もしなくては順位が下がる。上位に居ることは苦痛でもあった。中学生の高松宮杯英語の弁論大会に参加した。他校の生徒たちの英語には感銘させられた。

父は年に一回くらい顔を見せた。そのたびに母との口論。会うたびに口論になる理由、私にはわからない。「れい子が大人になったら分かるからね、弁護士になってお母さんを弁護してほしい。それとも薬局を開いたらお母さんも手伝ってあげられるから、」

私は、実験が好きだった。特に化学が好きで大人になったら実験室で働きたい。そんな夢を抱きながらも、反抗期に入った私は、黙って過ごすことが多くなった。いつも母の考えが正しい、優しい母。暖かい懷に抱かれて育った私に、母の職場でのストレス、体に現われてくる更年期の症状など知る由も無かった。母の小言が増えてきた。

高校入試が近づいて私の希望はトップ校だけだった。そこへ行くには電車を乗



18 歳 高校 3 年生の頃

り継いで一時間にかかる。母は早く起きてお弁当をつくり、私を送り出してから出勤しなくてはならない。

それで自転車でも行ける次の高校を進めてきた。（校区が広がった分、トップが入ってきた）。今までのトップ校には隣の従兄が卒業していたので、そこが良いという。

悩んだ末、母の思う通りに願書を申請した。性格上、私はいつも完璧主義。九〇点以上なんて考えないで満点がとれるようにいつも頑張ってきた。だから副教科も良い点だったと思う。

希望の高校では無かったけれど、私にとつ

て、素晴らしい高校だった。

生徒の自主性に任せて高校は動いていた。何もかも尊敬できた。だけど、高校の先生たちは、ただ授業に入って教えて、人間味が無いように見えた。生徒たちには不良もいないし、論さなければならない子供たちが居ないから……。先生の輝きが見られない。

入学して一年間は、いろんな友人が引き、ホームルームではいろんな議題で論争しあった。

私は、ほとんど聞くことが多かった。「神や宗教を信じる人は心の弱い人間だと思う」と、ある人。また、この世で一番尊敬する人は？ の返答に偉人をあげるのがほとんどだったけれど、「自分の母です」と答えた人には、驚いた。

その人は、母親と二人で暮らす男子生徒だった。

《お母さんか……。》

心にいつまでも残った……。

認知問題

高校二年の頃から認知問題が勃発した。それまでも両親の口論は認知問題が原因だった。

とにかく私の将来のためにと母は常に訴えた。そして、夫婦のまた大人の人間関係が複雑に絡まってきた。

私が産まれた頃、父の奥さんは病氣療養後亡くなり、母が父の子供たちとの家庭を夢見ていたにも関わらず、職場の独身女性と再婚し母の夢を踏みにした。その人は、四十五歳まで初婚で子供のいる母に嫉妬していた。父の子供たちはその時独立していて（亡き二人を合わせて五人の男性と女兒の私）、認知は特にその妻が反対していた。

小五の雨の降るある夜だった。認知を懇願して母と父宅を訪問した。玄関先で

火鉢を囲んでいた私は、驚いておばさんの目をじっと見つめた。火鉢をバンバンたたきながら母を鋭い言葉でなじつて怒っていたのだ。

その帰り道、雨に打たれる冷たい黒いアスファルトの道路が、しっかりと脳裏に焼きついた。

《私は、お母さんを幸せにするんだ。絶対に……。》

あれ以来の大人の社会だった。悩みにぶつかつた。

学校では 修学旅行や楽しい文化祭も終え 進学に向けて、めいめいが自分のことをやり始めた。

心が見えなくなってきた。人間関係が少しギスギスし始めた。

わずらわしかった。大人になるのが嫌だった。誰も信じられない。心って何？ 生きるってなに？ 高校はまるで巨大なコンクリートの壁に囲まれ息苦しかった。つまらないなあ……。

帰宅すると 母はいつも動いている。縫物したり、ミシン掛けしたり。そんな

母に、「生きるって何？」と聞いても答えは出てこなかった。

必死で子供を育て生きているのにそんな残酷な質問を母によくできたものだわ。

一年の担任に相談すると、「助けてあげたいけれど先生も何も出来ん。百獣の王ライオンはなあ、自分の子供を強くするためにその子を谷に突き落とすのだよ。

君も自分でのりきらないとなあ。」と、返ってきた。

その苦しかったトンネルからやっと出たのは、三ヶ月後位だったかな。

青春時代に太宰治の「人間失格」は読んだらマイナス思考を呼び込んでしまうから良くないな……と思った。

この苦しい日々と前後して、戸籍には父の名前が記載された。認知は



正式に認められた父と娘

父の弟と、父の次男（三十六歳）の協力があつてのことだった。

長男は四十歳くらいで病死。私には病弱な二十七歳だった兄もおり、二人の兄が出来た。母は、亡き長男に六歳の頃、私が妹だと面会させていた。でも、兄を思い出せない。

うろ覚えの思い出……。

母と鹿児島に行ったついでに会ったその伯父は、「幼稚園」という雑誌をお土産におない年の真知子ちゃんと鹿児島駅まで見送りに来てくれました。そして、母が認知を依頼したのです。

伯父は、れい子のために好弘と相談してうまくやってあげようと……。そして次の兄を紹介されました。兄は急に妹が現われたので喜んでくれ、家族との交流も始まりました。（兄には妻と小二の娘、三歳の息子が居た。）

高三になって自分の進路を考えだした頃、それまでも小さな家庭座談会には時々母と参加していたが、はつきりと決めなくてはいけない時が来た。

十月、堺の市民会館で大きな講演会があった。その時、母娘の感激した物語が私の心に鋭く突き刺さった。

私はこれで良いのだろうか？これが母への恩になるのかな……

次の日、私の将来について相談しに行った。

進学か就職か

この時学んでいた学問の指導者と言われる有名なある大会社の社長さんだった。

そこで、「お母さんと同じ運命をたどりたくなかったら進学は止めて家庭に入りなさい。学費は孫に使ってやりなさい。家庭に入ることが親孝行の道です。」と示され就職することにした。その秋、友人たちが進学に向かってラストスパートをかける頃、私は運転免許取得に通った。これも一度も落後せず最少の金額で合



初めての運転で海へ ご機嫌
で助手席に乗ってくれた母。

格した。また、父が退職後に開校したタイピスト学院（生徒一〇〇名余りのほとんどが女性）に放課後電車で通った。

そこには九歳年上の兄が父の傍で働いていた。子供の頃から病弱

で高校生の時、腎臓の手術を受けそのまま中途退学で療養し、父の仕事を手伝っていた。住居は副院長をしている兄の元看護婦と住んでいた。その兄が一番私に似ているらしい。

そのころには、認知も完了し娘が出来たことを父は喜んでくれた。

幼い頃は、父親らしいことは何もせず、認知の条件も（財産は一切要求しないこと、母親の財産は全部管理させること）だった。何を虫のいいことを……、結局、財産は要求しないに落ち着いた。養育費も誕生プレゼントももらったことが無く、



れい子 18 歳、高校を卒業して 父の弟と（鹿児島）

全て母の力のお陰です。

ある女生徒は、特に父になれなれしく、
プレゼントもねだっていた。

「どうして私には？」と聞くと娘は別
だと答えた父。

クラスの皆が進学していく中、二人だ
けが就職の道へと進んだ。

高校の卒業式も終え、入社式までの
間、私は母の助言で、親戚を頼って九州
旅行に行った。母のみんなへの接し方が
恩を感じてなのか私に返ってくる。本当
にありがたいと感謝。福岡、熊本、鹿児
島、宮崎と親戚が必ず電車から降りると

駅まで迎えに来てくれた。九州の名所は全てと言っていいくらい観光できた。去年お世話になった父の弟は真知子ちゃんと宮崎へドライブに連れて行って下さった。みんな親切で優しく、気持ちよく泊めてくれた。五件の家庭がそれぞれに同伴観光で、本当に感謝です。母が産まれた鹿児島ではほとんどが母の子供だと、各々の家に呼んでくれる。ごちそうやお風呂を呼ばれ幸せだった。みんなみんな良い人ばかりだった。母とは、毎日のがきで連絡した。「今日はどこそこに行つたよ」と……。約一カ月の旅行は本当に楽しかった。嬉しかった……。

交通事故

そして四月、私はある某大製鉄会社へと就職して新しい社会人への出発をした。その年の十月、会社にも慣れだした早朝の通勤途中、予想もしない交通事故に



新入社員として福祉課へ配属

合った。

ナナハンと呼ばれる大きなバイクに乗った未成年の少年に後ろから追突されたのだった。

気がついたのは、病院のベッドの上。母に心配をかけてしまう。母に知らせないで……。うつろな気分で目を覚ますと、心配そうな母の姿があった。

「ごめんなさい。心配かけて……。」

その後、母の勤め先の近くの病院に転院した。母がお昼休みに様子を見に来れるようにと配慮された。事故の数日後は、青年部大阪支部代表の青年の

主張に参加予定だった。この未熟な者には、発表する資格が無いと、神様からの促しのように思えた。

あの事故で、死の淵を体験させられた。夜中に五回も痛みを押さえるために注射をして、先生を寝かせなかったこと。ごめんなさい。

退院まで一カ月かかった。自分の不徳のなせる技、相手は保険にも入っていないくて治療費だけでした。何回ともなく来る激痛。入院中に窓から見える空と木々を見ながらひと時たりとも同じ姿は無く、日々姿を変えて葉を落としていく。私は生きているのではなくて生かされているのだとひとひと感じた日々でした。

退院後も少し気分が良いからと一〇メートル近く歩くと夜になって高熱にうなされるのです。このまま死んでしまうのでは、朝が来ないのではと思って目が覚めると明るい朝を迎えた時の嬉しさは、何物にも代えがたい。普通のことなのに嬉しいなんて……。半年経つても微熱は三七度三分。いつも疲れからか目が潤んでいた。

半年ぶりに出社したが福祉課に私の席は無かった。半年間、新入社員にかけてきた資本を「おかえり」と迎えてくれるほど会社経営はそんなに甘くは無い。配属先は会社で一番忙しい活気の満ちた生産調整課だった。東大や京大卒のエリートが忙しく働いている所だ。その頃はパソコンではなく、大型コンピュータがジーコジーコとせわしく動き、一〇〇名近い社員が広いオフィスで活気良く会社を担っていた。その中でタイプの経験から会社の受注先へ送り状をつくり四時の航空便に間に合わせる時間との戦いの仕事だった。

八時から四時までの勤務時間なので、早朝六時過ぎに家を出て電車に乗り、バスにのり換え七時半には到着して、朝の机の拭き掃除。ほとんど送付先の配布が主な仕事で、次々と仕事に追われ、毎日が残業だった。体はクタクタでストレスも溜まってくる。乗り換えでやっと帰宅できても、また早朝出勤を考えると、億劫だった。足が地についていないのを感じた。私には合っていない。

いつまで続くのだろう。休日には同期の友人たち（同期入社は四〇名）とハイ



昭和 44 年 5 月 2 日 れい子 20 歳

らの出勤だけでなく、帰りは夜九時や十時になった。母が心配してまたある人に相談すると、自転車通勤できる服地メーカーの事務員にと紹介くださった。その後、個人経営の会社に移り、帰宅後は茶道・華道・裁縫にと毎日がお稽古だった。お見合いも三回くらい経験した。でもピンと来なくて断った。

「れい子が決めたらいいよ。気にしなくていいからね。頭を下げに行くから

キングに行ったりパーティに誘われたり楽しかったけれど、苦労があれば楽しいこともあると自分に言い聞かせ通勤した。体調はもともと丈夫だったので、少しずつ良くなつて事故に合ったことすら忘れるほどになった。早朝か

……」と母。

引き合わせてくれた人から「相手方は乗り気なのに、断るなんてそんな身分か」と皮肉を言われて母の知人は去って行った。

母、家を新築する

万博の年、私が二十歳の時、母は、家を新築した。

設計は母との合作。屋根の形、台所、など母。私は部屋の間取りに窓が主体。知人の新築家屋の棟梁を紹介された。昔堅気の腕の立つ大工さんだった。私たち親子のことを考えて、いろいろとアドバイスして下さる。そして我が家が完成した。その年の十月、忠岡の秋祭りに京都の兄宅に遊びに出かけた。母の手紙を持って……。

あこがれの結婚へ

家も完成したし、れい子も成人したから良い人が居たら紹介してほしい。との内容だった。

「そうか、れい子もそんな年になったのか。また考えておくよ」と言っていたところへ、……

「父親が倒れたので今から飛行機で熊本に帰ります」と挨拶に来た男性が現れた。（兄は当時、夫婦で郵便局の寮長の仕事に就いていた。その前は、本局に勤め、若い人たちを見る目を持っていた。その後、課長、局長になり、在籍中に心臓発作で亡くなる。五十九歳。）

「オー、ちょうどいいところに来た。この人と会わせなかったのだ」と兄。戻ってきたら二人で会うことになった。それで後日、嵐山へ行った。言葉使いも優し

いし、丁寧だし、笑顔もいい。レストランで食事した時、フォークとスプーンは苦手だからとお箸を注文した。正直でまじめだった。私の心は完全に彼に持つて行かれた。こんなに私に合った人がいたなんて。私のために生きていてくれたのだわ……。帰宅後、どうだったかと母に聞かれ、「この人に決めた。私のために存在してくれていた人みたい……。」と。

「近所の人がお見合いを持つてきてくれたけど、どうする?」「断つて……」
「あいしやう相性も見てもらったほうがいいのじゃ……」「私はこの人に決めたの。来週会う約束したから。易者さんに見てもらうのは今は止めておく」

次の休日、若草山に行った。

自分から歩いて私をエスコートしてくれる。やはり、この人しかない。これが縁というもののなの? でも私は、その人の本性を見ぬけていなかった……。男心を知るといふそんな経験はしたことが無い。まして家族に男はいない。男性の心理は全く分からなかった。見かけの性格に正直に信じてしまった。いえ、これ

がその人の性格だった。表裏の無い私からして、だまされたわけではないけれど妻となった人だけにだけは本音で話す性格で、それ以外はいつも体裁を保つ人だったなんて……。心が疲れると思う。結婚後二カ月も経ないうちに分かつてきた。

今のように携帯電話があれば意思の疎通もはかれるけれど、お見合いでは一週間ごとでは理解が出来ない。それで毎日の様子を日記に記し、会う時に交換しあうことにした。式までにノートは何冊にもなった。

結婚式の準備は母一人がいろいろと準備。父にも出席だけをお願いした。「入籍して家に入ってくれて一緒に住む」という条件が母には一番だった。田舎の両親から大事な次男を婿にもらい受けるのだから、負担をかけてはいけなないと。式場は会ったときに二人で決めて下見をした。

昭和四十六年三月二十九日、二十七歳と二十一歳の二人の門出は、親戚、恩師、知人、友人たちに囲まれ涙の盛大な祝宴となった。「おめでとう！ 良かったね。これからは、楽しい家庭を築いてね！」一人ひとりの祝福の言葉と幸せの感激で



新築した家 新婚生活

涙があふれた。この日をどんなに夢見ていたか、母の喜びは、ひとしおだった。安堵の涙で満たされていたと思う。「お母さん、ありがとう」新婚旅行は、「到着後ハネムーンバスで観光地巡り」が主流となっていた九州を避け、静かな山陰から瀬戸内周りの観光を旅行会社に依頼した。個人予約だから高価だった。

電車の時刻を見たり、上手に動かないと乗り過ぎす。ゆっくり行けばいい……

と、高をくくっていた。ところが大阪と違い、山陰はのんびりムード、なかなか電車がやってこない。駅に降りてバス停に向かうが、時間が過ぎている。タクシーも見つかるのに一苦労。アーアー困った。今から五十年も前のこと、無理は無いようです。夫になった人かも

う少し動いてくれたなら安心もできるものが……。全然、動こうとしない。何からやればよいのかまるつきりわからないようだ。急に不安になってきて、この人には託せないのでは……。心配が暗雲のように立ち込めてきた。あの旅行中の四日間、早く家に帰りたいと思ったことは今までに無い。

新婚旅行から帰宅して母は、疲れたでしょうと二人を迎え入れてくれた。

やっと帰れた。こんなに家が恋しいなんて思いもよらない旅行だった。

翌日、近所への挨拶回り。出勤してお土産も配って回った。

新生活の始まり

母娘二人生活は、三人の新生活へと動き出した。私は妊娠八力月で、退社。長男が産まれてから、母も定年退職した、そして長女が生まれ、家族五人の幸せな



夫と長男 0 歳（熊本城にて）

日々が続いた。こんな日を待ち望んでいた。編み物をしながら夫の帰りを待つ。近くの公園のブランコの音がギーコギーコとかすかに聞こえてくる。夫の帰宅時間には子供と近くまで迎えに行く。

夫の姿を見かけると「パパだ。パパア！」と駆け寄っていく。抱っこされて嬉しそうに帰ってくる姿。パパの鞆を持って私も玄関に入る。こんなありふれた日常が本当に幸せだった。

でも子供が熱を出すと、夫は不機嫌になる。

「女が二人も家に居りながら子供に熱を出させるとは……」

不服そうに、黙って玄関から二階へ直行。上がる姿が見える。普通なら「どう

や調子は、良くなつたか？」と様子を見に来るのが当然だと思うけど……。同居の母には、遠慮しながらも、私には思つたことを何もかもストレート。こんなこと言つて悪いと思わないのかなと。

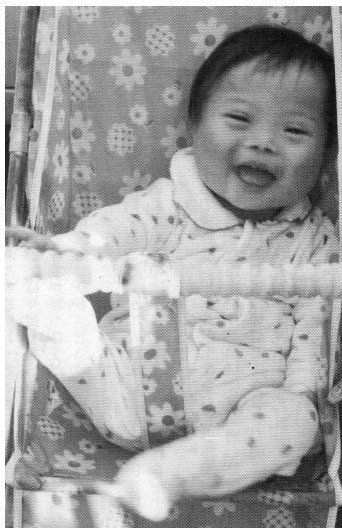
夫は愚痴るし、母は遠慮があり言えない。母にはずっと良い婿であつてほしいと私は思っている。母も良い婿だと思いきっている。では、そんな心が育つた環境が違うのに三人生活に無理は無いのかな、中に入っている私は、母との軋轢^{あつれき}、夫からの無言の《目》を感じて過ごした。

ムシロ（ごぎ）に針が刺さっているのを知らずに、安心して横になつたかと思うと「痛い！」とびつくりさせられる。そんな調子の夫。いつチクチク来るかわからない。

「結婚したら、絶対に夫婦喧嘩はしないでいきましょうね。」と私の言葉に一言も返さなかつた人。だから約束はしていない。しないはずだわ、自分の性格は自分で分かつてたはずだから。

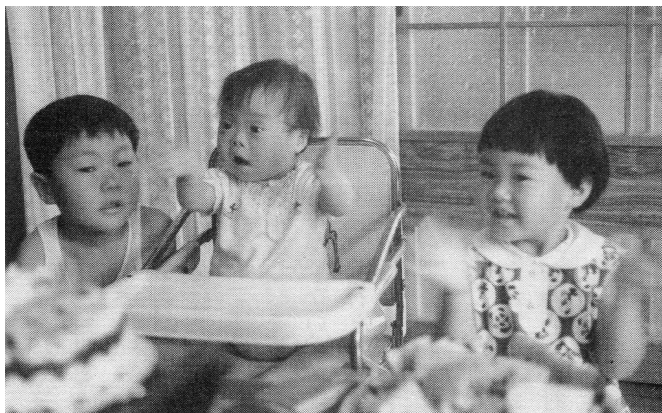
障害児の秀ちゃん

五人家族のにぎやかな楽しい日々は過ぎて行つた。
そして誕生した三人目の子供は先天性のダウン症という障害児だった。
生まれた時から心臓疾患もあり、弱かった。



秀行の笑顔が生きる勇気を与えてくれます。

母は、「この子は少しおかしい。変だよ」と産湯を浴びせながら言つた。お乳の飲みも悪く手足に何となく力が無い。「今度の検診で先生に話してきなさい。」と。十八日目の医師の宣告は、私たちを奈落の底へと突き落とした。



お姉ちゃんの誕生日——「僕も手をたたいて、
ハッピーバースデイを唄っているところだよ。」

ダウン？寝たきりなの？ 動けるの？との思いが脳裏を駆け巡った。「歩くことも走ることもできますが、普通の子よりも成長が遅く、知能も低い。早く老化が進み、長くは生きられないでしょう。」

病院からどう歩いて帰ったのか、悲しみで顔をあげられないでいた。帰宅後、家にある本から探せるだけ知識を探した。夫婦の血液検査の結果、それは確実となった。ダウン症一〇〇人中たった一人の確率のモザイク型だった。育て方によって健康児に近くなると。やはり上の子の三歳児検診で妊娠をしらずに受けたレン



3 歳 2 か月 少しささえると立っていられます。

トゲンでの突然変異が原因だったのでは
……。

その後の検診で親のレントゲンは無
くなっていた。その後、成人病センター
を紹介され全国ダウン症親の会「こぼと
会」や町の障害児親の会にも入会。弱かつ
たのですねに風邪をこじらせ肺炎になっ
た。弱気になった。この子と共に消えて
しまいたい……。何度そう思ったことか。
上の子供たちを寝かせつけ、ベランダへ
洗濯ものを干しに行った。北風の吹く寒
い寒い夜だった。手が引きちぎられるよ
うな痛さ。今、干したばかりのおむつが

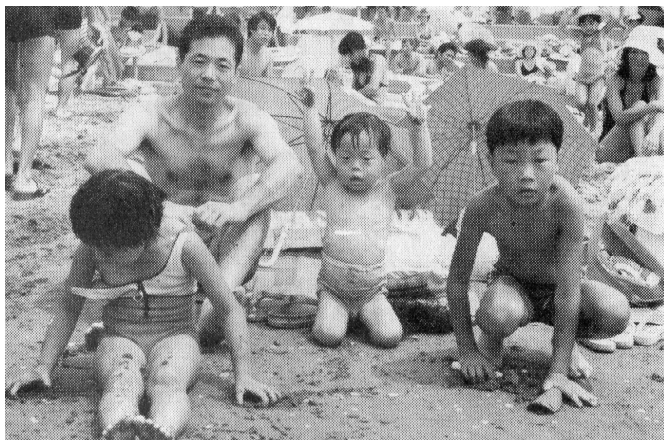


陸では歩けなくても、水中ではホラこの通り！

ピツと薄い板になる。こんな苦しみいつまで続くのか、未来も見えないこの子の人生に、私たちの将来に途方もなく悲しみが込み上げ一人ベランダで泣いた。

涙を見せては駄目、私にはまだ二人の子供も母もいる。しっかりしなくては。ここでくじけては駄目。と自分を奮い立たせ寝静まった廊下を静かに歩いた。

他人には優しく、喧嘩なんかしたこと無いでしょう。」と言われる夫は、私には頑固で内弁慶で難しかった。夫には頼れないが私には可愛い子供たちが生きがいだった。また育児で忙しかったか



大好きなプールや海！

ら気を紛らわせて暮らした。

そんな夫婦だから、障害児をこの家庭の太陽として宝として神様は与えて下さったのだと思った。それは、子供のおむつ代えや哺乳さえしたことの無い夫が、手伝ってくれるようになった。そして優しくなった。上の子供たちも手がかからず、弟を可愛がり、兄は妹や母の面倒まで見るくらい優しい子に育っていった。たった秀行と一年半の違いで、妹はしっかりしていた。

この家族は、障害児の秀行を中心に回っていった。

何回も死と直面するほどの病弱な子供だったけど、初めは外に連れ出すのが恥ずかしい醜い自分だったけど、生き返り元気になるごとに私は生まれ変わっていった、この子を育てることで、育てられていたのだった。

三歳八カ月で歩いた秀行は、この四月モズ学園に入園してから歩き始めた。あとわずか五カ月で亡くなってしまうとは信じられないほど、秀行の成長は目覚ましいものだった。

親子遠足では、他の子供を担当し、その子の親として行動する。多動の自閉症の子供には、目だけ追っていても何があるか分からないので、付いていくのに大変だ。こうして障害児たちのことも勉強させてもらっている。運動会では、やっとな歩けた秀行にみんなの声援でにこにこ得意げに笑顔で走りきった姿を思い出す。とても良い思い出をたくさんたくさん作ってきた秀行だった。人の子も自分の子、そして底辺と言われるこの社会に、献身的で優しく思いやりを持って差別なく、接して下さる先生方に感謝です。

赤ちゃんの時はⅡ三歳近くても赤ちゃんに見えましたⅡモズ学園に行くまで大阪市内の「育徳園」や「パピースクール」にも姉を連れて行つた。雅代はいつの間にか障害児に溶け込んでいた。思いやりも育つていったように思える。モズ学園の通園バスの運転手さんが、特に大好きで園に着いたらいつも抱っこされ、まさにパパになるらしい。二月に入つて、優しい先生方に守られていた秀行の園生活も、寒い冬には勝てなかったようです。

秀行の死

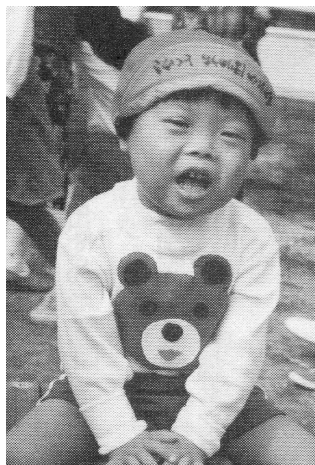
熱を出してグズグズした日が続き家での療養が始まった。そして入院して一カ月、一九八〇年三月十日に亡くなりました。

重い重い短い命を背負つて、この世に誕生した幸せな秀行でした。

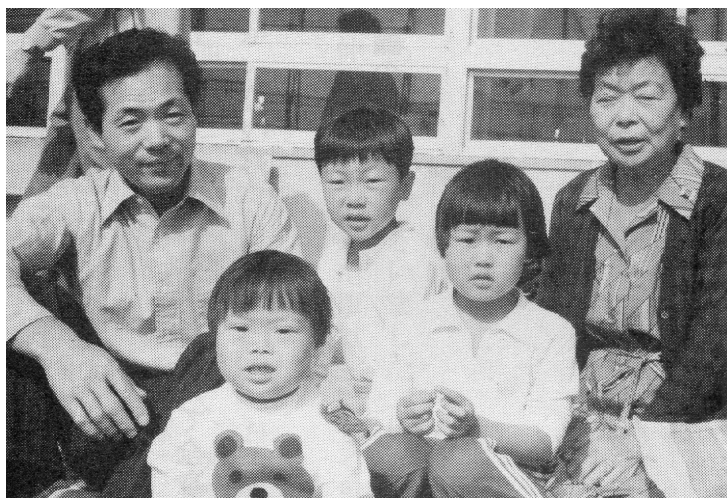
秀行の笑顔と片言の「ママ」が、頭から離れない。もう一度、ママのところへ戻ってきて！ 秀行の小さな洋服を抱きしめて泣いた。秀行の魂はどこへ行ってしまったのか。魂を追いつめ仏法の書を読み、般若心経を覚え、毎朝、毎晩、読経しました。そして、誰も家にいなくなると寂しさにこらえ切れずに泣けてきた。その寂しさも悲しんではおれない事態がやってきた。

四月、雅代の年長の幼稚園。秀行が亡くなったことを知ってか、時間が出来たからとPTAの委員に選ばれた。今まで育児に追われて任せっぱなしなので関心も無く、委員なんてしたことも無い。ところが委員の中の四役の選出に会長に選出された。びっくりして驚いて、断り続けた。今までは副会長から会長になるという申し送りがあったけれど、今年から全部の町の学校がその方針になったという。余りにも突然で訳も分からない私が引き受けるわけにはいかないからと、園長先生に話した。ところが今年は選挙なので、例外を作るわけにはいかないと……

母は、「仕方が無い。れい子だったらやれるからやりなさい。お母さんが出来



「こぐま組」、仲良しの育ちゃんと。



モズ学園での運動会。

ることなら応援するよ。」と、選出されて三日間考えた末に、胃の痛みから逃げるように承諾した。母は学校に勤めていたからPTAは良く知っている。

それで一年間私は頑張ることにした。いろんな人間模様が繰り出され、悩み、いろいろと学んだ。

そして二年後の妊娠出産と育児でPTAは休憩、となる。

三男の誕生

もう一度私のところへ戻ってきてほしいという願いに、秀行の誕生日を予定日として誕生したのが三男の秀和でした。秀行の生きた軌跡をたどって同じように同じ病院で治療を受けてきたのです。体内で逆子にもなり強制体操もした。秀和は余りにも元氣過ぎて、生後八か月で伝い歩き、十か月で歩きだした。動き過ぎ



富士山五合目にて 秀和 1才半

て腸がふさが切れずにヘルニアの手術もうけた。秀行の年で他界するのではと心配したのですがその四歳も過ぎてもう三十八歳になった。

秀和の妊娠中、医師からダウン症を回避する羊水検査があるとのことだったが「どんな子であつても育てます。検査は受けません」と断った。

その決心に、先生は出産するまで見守つて下さった。

夜の十時。陣痛が強くなってきて、看護婦さん以外誰もいない。家族も帰った陣痛室。「非番なのに帰らないで待ってください

てるのよ。」との言葉。先生が現われた、黙って苦しんでいる私の手を握って下さる。温かかった。心がしみてくる。不安な私は元氣付けられそれからすぐに出産した。黙って感激している私に医師は「どうした？」と尋ねた。「子供は大丈夫ですか？ 手足はありますか？」「大丈夫、元氣な男の子だよ。」たったそれだけの言葉なのに、安堵感が広がった。優しくかった。院長は人氣で、いつも患者でいっぱい。忙しいから扱いも痛い。でもこの先生には人間味があり、今でもその所作と言葉は忘れない。先生ありがとうございました。

こうして生まれた秀和の運命は、四歳を過ぎた時に、秀和としての人生を歩きだすだろう。

三人の子供たちは、それぞれが尊い命の織物を織っていく。可愛いけれど、成長するほど大変だ。この子たちの人生は、各々に任せて生きて行きましょう。



私の教室での学習風景（本間 12 畳）

教室の指導者としての仕事

一九八三年四月二十日、私の祖母の
翔月命日だった。

新聞から目にしたのは、指導者募集
の広告。私は、母が出勤して帰るまで
の留守の間、ずっとこの祖母の傍で育っ
てきた。そして四歳で他界してから、
母と二人暮らしになったのだ。

死の床で力なく孫たちの名を呼び、
握手を求めた。別居の孫たちは怖がつ
て、傍に行こうとしない。「おばあちゃ
ん、なに？ れい子よ。」と五歳を迎えよ

うとしている私は四歳の従妹たちより少しは思いやりが出ていた。

怖がらないで傍に来てあげて……と思いつながら祖母の手を握った。病床に在って「食事の配ぜんや、なんだかんだと役に立つよ。本当にれい子を産んで良かったよ。」と、母や祖母は喜んでくれた。その祖母が私に道を示してくれている。母とも相談し、さつそく問い合わせた。子育てと両立し好きなことができる。子供も好き、勉強も好き、この地域の子供たちに勉強の楽しさを伝えたい。わくわくして説明会に出席した。

高校入試の問題集、一般常識の問題集を買ってきて、さつそく勉強。

久しぶりの勉強に心が弾んだ。英検も今の子供たちの身になって四級、三級に臨んだ。(二級の受験を目の前に母が急死。二歳の子供や家族の家事育児それに、仕事も始めて時間が無い。)とにかく、子供の目線から見た英検は三級まで合格したが、二級は受験料を払っただけで、断念することになった。面接と試験を受け、三か月間の講習の後、開設した。

教室は不思議なところですよ。

(ネットに載せたマイページ)

子供たち一人ひとりがその子に合った教材プリントを学習していて、二年生が六年の内容を解いているかと思えば、六年生が小二の問題を解いている。そして基礎を固めて学年を超えて自信を付けて行く。でも、なるべく早い入会がお勧めです。基礎を固めるまでにたくさんの教材をしなければならないので、負担になるのです。

国語では、本当になる人身体や宇宙の不思議をプリントから学び、未知の世界が広がります。興味があつて国語は面白いとのことですよ。

英語では、体にシャワーを浴びるように機器から流れる外人の発音を聞いて学習します。読み書きしながら英語慣れしていきます。

ただし、教室に来るだけでは、充分ではありませんよ。

集中力と自学自習の精神が、効果を倍増します。

そして漢方薬のように体にじわじわ効いてきます。

さあ、この世界へいらっしやいませんか。

元気な笑顔をお待ちしています。

指導者

◎チラシから

新型コロナウイルスが世間を騒がせるようになって一年が過ぎました。

まだまだ、収束せずに感染が広がり、緊急事態宣言が出されています。

以前の宣言時には学校も休校になってご家族の皆様の負担も大変だった事とお察しします。

学校が休校でも、与えられた教材をやり続けてくれました。コツコツ進め

ていつのまにか上の教材を解き、高校教材を学んでいる。基礎をつけて自信をつけて自分の未来の選択を広げてください。

ここは計算塾ではありません。国語、英語の読解力と高校数学の醍醐味を味わえる素晴らしい夢と希望にあふれる学習塾です。

個人別で、努力した分、得られる学力です。心して頑張りましょう！

最愛の母の死

教室を初めて一年余り。母は、突然、救急車で運ばれ急死した。

一九八四年十一月二十七日午後三時

その日は三時から教室の日だった。「れい子、病院へ連れて行って……」とヨ



母が亡くなる7カ月前

ロヨロしながら言ってきた。私は掃除機をかけ準備に忙しくしている最中だった。「エッ? 今、病院から帰って来たばかりなのに……。用意するから早く出てきて!」と、手を止めてガレージに行った。なかなか出てこない。「おばあちゃん!」と怒ったように強く言った。

それでも出てこない。部屋をのぞくと母が「れい子!」と呼ぼうとすれども声が出ないのか。

立ったままロッカーにもたれて真つ赤な顔で「れ!」……

それからは飛び跳ねて電話のところへ行ったが、ショックすぎて救急車が呼べない。一一九では無かった。どんな状態かなど向こうは冷静。サイレンを鳴らしてもいいですか？ など、鳴らしていい。救急車そちらから早く呼んで！ と自分が心臓まひになるのでは、と思うくらい心臓がバクバクしていた。親戚の電話番号が思い出せず、電話帳で確かめた。

救急車と同時に従兄と母の従妹が来た。私が救急車に乗り、従兄が自転車ですのあとを病院まで付き、叔母には二階でお昼寝中の秀和を見てもらった。

救急車の中でも電気ショック。病院でも電気ショック。いくらショックを与えても母は、動かなかった。あつけない死だった。こんなにも早く死が訪れるなんて……。あと二カ月余りで七十歳を迎えられたのに……。まだ六十九なのに……。

いつも口癖のように話していた。「忙しいれい子に負担をかけられない」と。また最近「この頃、夜中に眠れなくてねえ。死んだ人の夢をよく見るの。寂しいかられい子に横に来て一緒に寝てほしいと思うけど、三人の子育てと仕事でそ

ういうわけにもいかんしねえ。」と言つてた。「お母さん、ごめんね。忙しすぎて、かまつてあげられず。もつともつと振り返れば良かったのに……。」

三十五年過ぎた今でも悔いが残ります。

母の年齢を過ぎて、七十一歳になりました。心はいつまでも子供なのに、体だけが老いていく。昔からそう言われていても、自分が実感しないと分らないものです。親孝行できずに母を亡くしたことが、悔やまれて悔やまれて……。もつと優しくすれば良かった……。急死するなんて……。優しく看病してあげたかった。

だけど、これで良かったの。病が長引いたら本人は苦しいだけ。看病したかったなど、自分の満足感だけでしょう？ 皆は「お母さんは、子供孝行してくれたのよ。孝行が出来なかったと思う人ほど親孝行が出来てるの。」そうかな？ そうかな？ お母さん、もう一度声を聞かせてよ……。もう一度、お母さんを思い出させてほしいの……。お・か・あ・さ・ん……。

一九九五年一月十七日 朝五時四十五分

ドーンという音と共に体が宙に浮き上がった。ガタガタ、ガタガタ、すぐにベッドから飛び出て廊下に出た。早く来なさい！ の言葉と同時に部屋から出てきた子供たちの姿。廊下に座り込む。立てない。家が壊れる！ 皆、すわりこんで下に行くことを考えた。階段は蛇のようにくねっていた。これが階段？ いつもの階段？

少し階段のくねりが無くなった時、滑り降りた。急いで玄関を開け、外に出た。薄モヤの中、門の前に発砲スチロールのようなものが落ちていた。早く、早く。家の前は一〇台ほどの車庫があり、広場がある。その前で、夜が白々と明けていくのを待ちながらも、私たちは震えていた。

電線がビュビュブルンブルン音を立てて、電柱もいつ倒れてくるか気をつけ



1995.1.17 阪神淡路大震災

ながら家を見守った。だんだん夜が明けてきて様子が見えだした。さっきの門の前の物体は、雪見灯籠の重い大きな頭部分だった。割れていた。家の中は、もうもうと煙が立ち込めたようになっていた。火事だ！と思ったが壁の土と、天井からの屋根がわらの土ぼこり。地震の揺れがおさまると徐々に部屋の様子が見えだした。

その後も、揺れはおさまらずグーッと地鳴りがしたかと思うと余震の揺れがやってきた。ユツサユツサと。夫は白浜に行っていた。子供三人と共に怖い三日間を過ごした。私の家は海に近い。お天気が良いと神



2011年3月11日、阪神淡路から16年後、東日本大震災が

戸のビル群が海から見える。砂地でいちご畑の場所だった。だから揺れには敏感な私。海拔二、三メートル。津波も怖い。川があふれて洪水、山が崩れて山崩れ、火山噴火、と、どこへ逃げても日本は、狭い島国で逃げようがない。恐怖で心を狭くするよりも、これこそ心の勉強をすれば？ 助かろうとしなくても、助かる命は救われる。これが少しずつ分かってきた。

恐れずに自然と共に生きていこう。

超大型台風が接近。田池先生の存命中はふしぎに、近畿地方上陸の直前で直角に進み、逸れることが多かった。だから心配な

かったけれど、亡くなるとやはりここ数年の台風は近畿に大きな被害をもたらした。
なんだか感じるのです。助かる時は助かると……。

台風接近でこわごわ待っていても、いつの間にか素通りしてあっけなく思う時もある。この心の持ち方で天変地異をどう迎え入れるか。怖がりの私の思いです。
この学びをしていると、欲しい物は自然と与えられ、全て整っていきます。生まれた時から全て整えられて生まれてくるのです。欲なく生きていけば幸せなのに成長するとともに欲を出し差別、区別し心が汚れていくのです。今の状態を感じ謝し喜んで生きていけば全て思うようにことが運びます。自分の思うようにしようとするから悩み、苦しむのです。

（コロナウイルスにしても嫌だと排斥するよりも、戦うよりも、包み込む優しい思いを持ったらどうでしょうか？）

そんな思いが上がってきました。

意識の世界への門

平成二年十二月中学卒業以来初めての同窓会を終え、四十歳になった私は恩師に記念写真と手記「小さな天使の記録」を持って会いに行った。二十五年ぶりに先生や友人たちと懐かしくワイワイと歓談したその同窓会を欠席した先生を訪れた時、この「意識の世界」への門をたたくことになった。

その世界は、まさしく亡き秀行の導きのように思えた。秀行を亡くして十年、友人から育児日記をしたためていたのを本にしないかと勧められた。秀行の生きた証に、そして供養になるならと、一〇〇部製本した。秀行がお世話になった人や、縁のあった人に自費出版して配った。その一冊を恩師に渡すと、

「れい子さん、この本を読んでみて。亡くなったお母さんにも会えるから……。」
その言葉に驚いた。



「小さな天使の記録」が「エルランティの光」に！

「エッ！ お母さんに会える……？」
手渡されたその本は
『エルランティの光』——宇宙に浮か
ぶ地球の姿が描かれた表紙の本だった。

神の子の道

子供たちを寝かせつけてから、夜遅
くまで読みふけた。えっ？ えっ？
こんなことが？……不思議なことに今
まで生きてきて、全く反対のことが書
かれていた。それなのに読むのをやめ

られない。ドンドンひきつけられて読んだ。

数日後、返しに行き、別の本、プリント、テープなど借りてきた。そして、その年の暮れ大阪市内に田池先生が来られるから、と講演に誘われた。大阪の府立高校の校長先生を退職して、この学びを説くために各地を回っておられるという。そして亡き秀行の祥月命日の三月十日、（これも不思議な日。田池先生とは



田池留吉先生 (1990 年当時)

十二月以来の再開）岐阜県の下呂で劇的な母との現象を見た。

母は生きている。母の意識は今も、生きている。ぜんそく発作で時々苦しんでいたが、その母だった。母の性格そのままに、私に語ってきた母。「サツサとやることを片付けなさい。お母さんもしなくちゃいけないことがたくさんあってね。グズグズ言ってるあんたに

かまっておれないよ。お話も聞きに行かなくちゃ……。」とそれ以外多くの言葉を発していた。私もいろいろ話していた。それは、母と、娘しか知り得ない内容だった。母は、私が幼いころは優しくかった、成長するにつれ、口やかましく厳しくなった。家を新築し、子供を育て上げ、結婚の準備も一人でやり、仕事を続け全てひとりで成してきた。強くなるのも当たり前だった。ツルの一声で親戚中の皆を集める力を持っている。母は偉かった。頭が下がる思いだ。その分、私は不満だった。もつと老人らしいおばあちゃんでしたら、親孝行もしやすいのに……。

「苦勞し続けてこんな性格になったのだから、仕方が無いよ。家で奥さんだけしてる身分じゃなかったからね。お酒もたばこも吸うじゃなし、帰って、疲れたと、デンとしているわけにはいかないから……。」

お給料は公務員だから男女一緒。親戚への援助も母だからこそ可能。母は、女大将だった。その母のお陰でみんなから愛されて大事にされた私だった。そんな母との現象だった……。

この神の子の道は、平成七年ごろから夫に反対され十五年位中断。反対されるのも無理はなかった。混乱しながらの私は、他力信仰を全くやめようと決心していたから。朝晩、お参りしていた仏壇の扉を閉め、祭っていた伊勢神宮の社を焼いたから……。毎朝お水を代え、般若心経を唱えた。神仏に祈ることで安らぎを得ていると思っていたけれど、逆だったことに気が付いた。神仏に頼り過ぎて心細くなり、小さな小さな狭い心になってしまっていることに気付いた。窓から空を眺めてフツと「神様がいなければ私の命は無くなる」と不安に思っていた。その不安をかき消すようにまた祈り続けていた私だった。

そんな私が一八〇度転換するような神仏に対する真つ白な心に変わった。噂を耳にした従兄弟たちは大丈夫かと心配した。けれど、私の心は、すっきりしたようだった。夫と共に学んでいたが、ある日の現象でチャネラーから自分の意識を聞いた夫は「あれはおれでは無い。あんな気違い集団やめておけ」と、反対された。反対されてまで来てはいけないと言われていたので、離れてしまった。

離れると目に見える社会の中で肉どっぷりに浸かってしまう。平成八年、一年後には仏壇は開けていた。でも以前のようにはない仏から心を離れた私だった。夫や子供たちにも自然にさせた。」親戚が来てもどうぞ……と。難しく考えないで自然に任せた。神仏から心を離していった時期だった。

再び、意識改革の道へ

夫婦で学びはじめた五年間だったが、夫が去ったあと、私も十四年程、休んでしまった。平成二十四年に再び学び始めた神の子の道、エルランティ。

時々、プリントやテープを借りて勉強していたけれど、取り残されていく思いで、遅れを感じていた。そこでは、チャネラーが出る現象は影を潜め、宇宙やUFOへ広がっていた。みんなチャネラーになれるんだから、チャネラーに頼って

いてはいけない。自分で自分の心を見て行けばよいこと……と。

私はやはり肉の世界からはなかなか離れられないでいた。余りにもいろいろなことが身辺に降りかかる。仕事も順調だが子供のことで悩みが尽きない。何か本当のことがあるのに、知らずにいるような……。私の人生は私のもの。夫に反対されても迷惑はかけない。もう一度始めてみよう……と決心。子供は四十歳、三十八歳、三十歳になっていた。もう手が離れているはずなのに……。

あの頃、子供の大学入試では、入試祈願に行くのが普通なのに、神から離れて無宗教に生きてきた。二人とも国立に合格できた時は、安堵した。「どうしたらいいの?」と尋ねられたが、その子の縁のあるところへ導かれるよ。と、神社にお参りしなかった。三人目の秀和は、自分の好きな道を選ぶから、と就職し塗装工になった。絵具で、塗るのが好きだった。公務員を勧めたが頑として了解しなかった。親としてアドバイスはしても、親の目や手を離れていく。とは言っても

苦難の道に進んでいく。子供たちの人生は子供たちの物。私がその道を行くのではないから、子供たちに任せて語るのは止めましょう。

田池留吉って何者？

この神の子の道は、一般の神と煩わしいから「田池留吉」となっていた。世界中には同姓同名が多いはずなのに、田池先生が世界でたった一人だった。

神、エルランティは田池留吉となっていた。そして「UTAの会」が運営することになった。田池先生はお元気な姿で居られた。久しぶりに会った皆さんもお元気そうだけれど白髪頭が多くなったように思えた。優しい波動が伝わってくる。「田池留吉の磁場反転！」田池留吉の磁場に向けて瞑想しなさい。「私は愛です。あなたも愛です。ひとつです。」全て宇宙の中で分け隔てなく、差別なくひとつ

なのです。

そしてお水の実験。円盤。いろいろと先生の息の入った物も次々と表れた。八十三歳になった先生がお元氣なうちにまた学べるとは、本当に幸せでした。八十八歳で亡くなられてもう四年半。あの頃は八百名位が先生を求めて沖繩や北海道、そして外国からも出席していた。出席者だけでもこんなに大勢だから多くの人が教えを受けていると思う。

たくさんの人なので先生のワンポイントメッセージだけでも大変なのに、二十年前には私に四十分余りも時間を使つて返答くださった。

「ここで言う神とは、私たちが信仰してきた神と同じなのですか？」

私は、これまで毎年伊勢神宮に参拝し、橿原神宮、いざなぎ神宮、そして氏神様、ありとあらゆる神々に祈り、手を合わせてきた。幸せの山の頂上にたどり着くのに、登山口がいくつもあるようにどんな方法でも、どんな神でも自由に選択できると思ってきた。母と二人の運命から自分の心使いと自己反省により運命を変え

て徳を積まねば……と教えられてきた。

しかし田池先生は、「神は自分の心に居ます。自分の中に居るのです。神は外には存在しませんよ」と……。

私は、神に祈ってきた。子供や母の病氣祈願。それなのに……。不安で過ごしたある日。全てのお礼に山の上の寺に行った。その寺は、本当にお世話になったところで、山河を望める爽快な気分になれる場所だった。子供や母の治癒祈願に水のお加持を受けに通った。いま、意識の世界だということを考えるといつもの参拝と違っていた。「今までありがとう。お世話になりました。」とお礼を言い、帰ろうとした時、フワッと体が浮いた途端、一メートル余りの高さから投げつけられた感じ。痛さでしばらくじっとしていたが、足の脛が赤くなっていた。帰宅してから熱を持ち、正座が出来なくなった。腫れが一カ月続いていた。足の腫れが引かないことを田池先生に話すと、チャネラーが私の足に心を向けただけで、私と神の対話が始まった。

「おまえはあちこち神を求め欲張りな奴だ。あっちフラフラ、こっちフラフラと歩いて回っておる。あの日、わしは、お前にいたづらをしてやったのだ。」と低い声で語りだした。足の痛みだけで詳細は話していないのに、私の足には寺の主の意識が宿っていた。いろいろと歩きまわった。脳の神様にも子供の頭に数滴の滴を受けに行った。効き目があると言われれば、藁にもすがる思いで頼って行つた。また、母や秀行の供養にと、薬師寺へ写経に通つた。静かな写経道場は、お線香の香りに包まれ、身が引き締まる思いだった。道端のお地藏様にも足を止め、お参りした。良いと思うことは全てやってきた。欲いっぱいなのに気付かなかつた。自分の満足心だけだったように思う。けれど、心の中は、寂しさでむなしかった。人生とはこんなものなんだと思っていた……。

あの現象以来、私の足は腫れもすぐに治まり正座が出来るようになっていた。不思議な出来事だった……。

閉めたお仏壇

家族との日常生活は、何事も無く過ぎて行つた。私の教室も生徒たちと順調に営まれていった。

ただ、今までの常識を覆すそんな大改革の教えの中で、頭の中は混乱した。家に祭つてある伊勢神宮のお社はどうするの？ お仏壇は？ 考えれば考えるほど混乱した。そして、ある日、とうとう決断した。

全て無宗教で生きて行こう！ 神は私の心の中。外にはいない……。

私は嫁ではなくて、この家の娘。嫁なら決断できないけれど、私ならやれる！と……。

祖父が友人の保証人になって失敗し、この大阪に家族で転居して（母は当時小六で、九人兄弟の真ん中。両親や妹たちを世話した。）大人になって満州に渡り、帰国してから公務員。両親と同居し、家計を助けてきた。母が三十五歳まで縁が

無かったのも当たり前のこと。戦死した弟の供養、病死の妹、そして亡き祖父。みんな母が供養し、そのあとを私に託した。お墓もお仏壇も一人で用意した立派な母……。父の生駒のお墓、母が眠る私の先祖、夫の熊本の先祖……。

そんなことをしていると私は、お墓参りだけで人生が明け暮れる。人は死ぬのが自然だから……。平成七年、秋、家のお仏壇の扉を閉めた。そして家にお祭りしてある伊勢の社も庭で焼いた……。

入院中の伯父との再会

鹿児島にある父と、母の、先祖のお墓参りを兼ねて三歳の秀和を連れて入院中の伯父を見舞った。

母が急死して一年近くたった。桜島が見える錦江湾のフェリーから母を思

い出しつつ、母の遺品を海に沈めた。

父の祖父は、西郷隆盛と西南戦争で功績があつた勇士の一人で、熊本城に写真があつた。十八年前、宮崎のドライブやお墓にも案内された優しかった伯父……。あれ以来、ご無沙汰なので、叔母さんは、「誰か分からないと思う。反応なくともごめんなさいね。」と言つた。でも伯父さんは覚えていた。「おお、れい子か……。覚えとるよ……。お母さんは元気じゃつとか？ れい子の子か……。よかにせじや……。よかにせじや……。」と秀和を引き寄せた。

嬉し涙と弱つた伯父の姿に悲しみがあふれた。

帰阪して二日後、亡くなつたことを兄から知らされた。

伯父は私を待つてくれた。伯父さん、ありがとう。

ご冥福を祈ります。

終戦五十年悲しみの叫び

一九九五年五月二十九日



沖縄ひめゆりの塔

書けません 涙だけが噴出してきて言葉としてまとまらない。たくさんの人が愛を待っているのに私には力が無くてどうしていけばみんなが救われて行くのでしょうか？

私が救うなんて傲慢すぎました。みんな、一人ひとりの心が大きくなって愛の光の中に溶けて救われていくのでしょうか。

昨日、「姫ゆりの塔」の映画を見に行った。何気なしに時間があるから、券をもらったか



沖縄戦戦没者の名前が延々と並び 平和記念公園

らと、縁をえた。

「姫ゆりの塔」その言葉は何か可憐な美しい響きを持たせていた。

四十六歳の私は戦後生まれで、全く戦争を知らない。苦しい戦時中を過ごした体験を聞かされていた人たちも今は亡くなり、「戦争」という言葉さえ色あせ、「進駐軍」という言葉も幼いころ、車からガムを分けてもらった思い出とともに、消えていく……

七年前 沖縄研修旅行の際、「首里城」「姫ゆりの塔」などの訪問は、あくまでも観光だった。「戦争を憎みこれ以上の悲しみを作

らないでほしい」との願いを込めてたくさん犠牲者の上に、今の私たちの幸せを感謝し黙とうを捧げ祈って沖繩を後にしたのでした。

でも、この映画は今までの上っ面だけの「瞑福を祈る」という言葉をはぎ取ってしまい、いろんなことを訴えかけてきた。

なんというすさまじい悲しみと命をかけて日本軍は戦ってきたのでしょうか。

二十四歳で沖繩で戦死した母の弟。鎮魂を託された我が家の仏壇。戦死者の家として……

「戦後五十年」 私たちはこの言葉をもう一度かみしめなくてはならない。

日本において今「戦争」は机上の言葉となり本当に亡き人々に感謝。でもそれと同じことが起こっている。雲仙の噴火、奥尻島の地震、阪神大震災、サリン事件、エイズ、エボラウイルスなど地上におけるいろんな天変地異。これらがただの言葉では済まなくなっているのが今の日常。

あの阪神大震災の真冬の明け方、暗闇の中での大揺れは、二度と忘れられない

夢の出来事？ まるで家が狂いだしたかの様に音を立てて怒りだし、二階がつぶれるまでにと、子供三人と外に逃げた。大揺れの時、階段の上で揺れが収まる一瞬をとらえ飛び出したが、階段があればどこまでにくねるとは……柱に捕まりすりこんでいた。子供たちを守らねばという母の本能で怖く感じなかった。

怖さは後から後から膨らんできた。用事で留守だった夫が帰宅したのは線路の復旧も終わり余震の揺れも収まりかけた二、三日後だった。

二十二歳、二十歳、十二歳の子供たちは、私よりも手早く行動し外の空き地に逃げたが、ゴースとなる轟音とビュンビュン喰る電線、大地が割れるのでは、映画さながらの恐怖。夜が白々と明けてきた。家の中に入るとモヤッと煙が立ち込めていた。ショートして火事？ それは天井からの埃と土壁の土埃だった。

テレビニュースで大惨事が映し出された。震源地は北淡路。画面を見るとゴースとなる轟音とユッサユッサの揺れ。キャー大阪だ。恐怖が増してくる、心臓が胸が熱くなる。心臓発作になりそう。画面の惨状に恐怖と悲しみの連続。私

はこうして暖かいベッドで眠れるのに、神戸の人たちは……それを思うだけで他人ごとではないことが身にしみてわかり、これが夢なら早く覚めてほしい。何度願ってもそれは避けられない現実でした。

胸が締め付けられる悲しみ、毎日、毎日涙でした。神戸の余震は必ず自宅でも揺れます。閑空が近いいため飛行機の飛ぶ音が、余震の前兆の地鳴りと紛らわしく、不安になります。

あれから四カ月、徐々に落ち着き、夜になると懐中電灯を持ち歩き火を使っていると離れられなかったのに、今では少しの揺れでは驚かなくなつた。震災にあつた人の悲しみ苦しみが痛いほど身にしみた日々だつた。

震災から二カ月して、サリン事件、オウムニュース。人々はまた震災を忘れオウムに目が行くのです。雲仙災害、奥尻地震。災害にあつた人々は今、どうしているのでしょうか。我が家も家の修理や家具の配置、二階のピアノ二台、一階へと業者に依頼したり忙しく日が過ぎた。

八月には主人の実家の熊本に行く予定、その時雲仙を訪れ亡くなった人たちに語りかけたいと思う。雲仙の焼け野原を背景にピースをして記念写真を撮るような、上九一色村を見たり、上有さんのファンになりたいとそんな馬鹿げた心でなくて、本当にその苦しみを一緒に考え、思いやりねぎらってあげられるそんな人間になりたい。

ボランティアの行動も心の中身なんです。偽善者では、被災者の心に和解はないでしょう。また助けてくれて当然という、甘えにも繋がりがかねない。この災害でいろんな人の心まで見えました。

戦争や災害で亡くなった人たちには、本当の供養が待たれている。

これからの災害は、いつみんなの前に起こってきて全てのもが一瞬にして消えてしまうかも知れない。そんな時、心ひとつで幸せにも不幸にもなるのです。貧しくとも心が人間に「愛」を教えてくれる。「愛」が人間の心を教えてくれる。いろんなことで「愛」の存在を気付かされる時がやってきました。

H7・6・3 能勢セミナー

心を見ようという気が無い。時間は二十四時間みんなにある。それなのに見ようとしていない自分。ではどこを見ているか。外のことばかり気にしている。服装や人の態度。もっと自分の中を見なさい。自分の周りにはたくさんの方。これからの人類にとってのいろんな試練。その時に、「神、ありがとう」の感謝の心を持てるか、箸をとるたびに思えるか、亡くなって半年くらいすると、エルランティを忘れてしまうから、こちらから意識で伝えてあげよう。肉を持つている今しか、エル勉強はできない。肉を離れたらエルの勉強は難しい。心があると分かる今。全てはエルランティに波長を合わせれば整う。

心を見る暇がないという人。「自分を救うのは自分自身ですよ。」の田池先生の言葉。「死んだら分かります」人のせいにする、人がなんとかしてくれると自己確立のない人、暇な人、乗せられやすい人、諸々の神が心の中にいる人。

エルランティに向いているか、違う方向に向いているかは、自分で感じるしかない。

存在していないのに存在している影。「私は神の子だ」と信を強くして生きる。

H7・6・4 朝 反省セミナーにて

私は自分を誇っていました。誇っていないつもりでも、人に自分の気持ちを知らせたいと、認めてほしいと、自己主張の強い人間だと思う。内面にある心が生活自体の現象となり影を作り上げていくのだと思う。

書きたい、送りたい衝動に駆られ自分を出してきた気がする。

そこへ来るまでは、こんな些細なことだと思いつながら、やはり自分が勉強したことは人にも勉強になるのだから、思い立ったときに行動に移さないと神の子の道は切れてしまう。やはり良いことは行動に移そうと思うのに、今日の反省セミナー

で自分の癖が少し分かった。自分と向き合う時間が私には必要だ。

人のいろんな心や努力を知ると自分をも知る。そして人への押し売りをしていくのでは、いいいえ、それを知って、みんなもそれぞれ勉強になるから……やはり自分を誇る心なのかな？ みんなもそんな心があるのかな？ うーん、そんな心が全部消えて、空気に溶けていったら神に戻るのかな？……紙やペンのない昔は心を表せない、やはり見えない心だけが本物で、あらゆるものに対処していくのが心だけ。心ひとつで誕生し、心ひとつを持って帰るのだから……。この神の子の道を勉強し、愛を波動で流せるような、以前の私とは少し違うと人が感じる私になろう。

反省会の日、お部屋でお茶を飲みつつ、話していると各自が勉強しようという気で出席しているのに私はすぐに眠気が来る。そしてたまに反省したからってまたそれを押し売りしているのではないかな。エルの人たちは学んでいるからいいけど、教える知らない人たちに、良いからと知らせたい。私のアピール癖？ どっ

ちなの？ もっともつと心を見つめて行こう。

「エボラウイルスの意識を読んで」

ウイルスは愛でもって自然の中に生かされていた。目には見えないほどの小さなウイルスにより人間の肉体は壊され破壊され死にいたること。つまりは肉に執着する心を見なさいという神の計らいなのに、それにも気付かず怖いね、嫌やね、と毛嫌いしていた私。自然界に生きているウイルスの命。この世の全ては愛の中、今日も一からスタートして心を見つめていきます。

すっかり反省したくて反省漬けになれば少しでも心が見えてきて神に近づけるかなと思い参加したセミナー。でもやはり欲に過ぎないね。

いかにも自分はこれで良いという生活に浸りきっていた。

でも周りの人たちは、すぐく自分を見つめていて、反省しているように見える。私なんか何も分かっていない。それなのに書きたいことを連ねている。もっともつと修行を積まなくては……現象では亡くなった後も母は苦勞して生きていた、そんな母に語りかけもしなかったのだろうか。「お母さん。お母さん」と毎日、写真の母に語りかけていたけど神の子の道を伝えることをしていただろうか。お母さんごめんね、もっともつと心を見つめていけば何かが分かってくるんだろうね、お母さんともつと身近に話せるんだろうね。

自分の心が分かってくるたびに恥ずかしくなってくる。いかにも「自分はこれだけ感じてきたの認めてね」の心が強すぎる。

「神の子の道は神と同質の光輝く愛の心です。

人を愛し、人とともに、心を磨き、互いに信じあうために生まれた魂です。こ

の世は心を磨き、神の愛をつたえるための修行の場。エルランティ田池……」

H 7・10・29 私的心癖

- ・すぐ自分の思うようにしようとする。
 - ・エルランティ田池の愛のエネルギーを感じにくくしている。
 - ・自分の想像の中で生きようとする。
 - ・業、カルマが深く肉の思いに戻りやすい。
- 自分が曇ったガラスのメガネやサングラスをかけて人を見ているのに気付かずにあの人は黒い、この人は赤い。などと思い込む自分。そんな人間ではない、透明なメガネでみるとみんな美しいそのままの人が」見えてくる。人はみな神と同質の光輝く魂です。

苦しむのは、苦しんでいる人が反省すること。つい、苦しめている人を恨むのだが、苦しむ自分の心を見つめてみることに。心を変えようと、自分が変わり、人が

変わる。人が変わると楽しい世界になってくる。

人間って素晴らしい。心って素晴らしい。何が無くても全て整う素晴らしい世界。幸せって何かが分かる。整うことを願って反省はダメ。目的と結果を反対に考える人が多い。先に反省。反省を目的にしていると結果が伴う。幸せになることを望んでの反省は他力。ダメ。動機の間違いを修正すること。

神の心に目覚めるために凝り固まった自分の心に気付くこと。凝り固まりすぎて臭気もしないかも……目に見えない一条の愛の光

H 10・2・15 泉大津ミニセミナー終了

今日でおしまい。長い間いろいろと勉強させていただきありがとうございました。反省文は、出席してこそノートに書けました。エルランティ田池のメッセー
ジが耳に入ってきます。

人はあなたの心を写す鏡です。

愛が流れた時、周りが変わってきます。

優しくなってきます。

あなた自身を愛して、あなた自身が変わっていきなさい。

お母さんの反省から始めなさい。信じて今日から始めなさい。

苦しみは神の愛。ようやく苦しみに気付きました。神の愛に気付きました。

気付かずに通り過ぎて行くところでした。

苦しみよ、ありがとう。神の愛よ、ありがとう。

H 29・4・26 朝5時18分 68歳誕生日

もう七十歳近い年になってしまった。

三人の子供に五人の孫。いろんな人生歩んで来たねえ。



エアロビクスダンスの仲間たちと 47 歳の頃

「もう六十なのだから」と母は口癖のように言っていた。「まだ六十なのだから」と友人のお母さんは言っていた。まだ、と、もうとの違いでその人の見た目の若さが違うように思えた。

この学びを始めて二十七年。ジムに通い始めて二十一年。塾の仕事で三十三年。みんな長く続いたなあ……以前は体もよく動き、エアロも頑張っていたけれど、やはり年をとるって疲れがすぐに出るとは、こういうことか……体力の限界を感じる。

止めてしまったらもっと体力が落ちて、肥満にもなるだろう。若いころは六カ月で

一〇キロ痩せられたけど、リバウンドしてからは、なかなか痩せない。好きなものは健康だから食欲があつて食べたいし、まあこれで行きましょう……というところ。

世界情勢はテレビで放送される連日のニュース。イスラム教徒のＩＳ問題。シリアからの何十万人と言う難民の受け入れで、自国を守ろうとぶつかり合う政権。難民に紛れ込むテロ。アメリカ大統領に就任したトランプが、「アメリカファースト」を唱え、欧州の国々も混乱。誰がフランスの大統領になるかで揺れ動いている。ＥＵを離脱したイギリスは後悔する国民と賛成した国民とまたまた混乱。四つの国に分裂の危機。ナチスの迫害の傷をもつドイツは難民受け入れに寛容だったがあまりにも多くの難民に国民が不平をもちだして、大混乱。日本は受け入れ態勢が少数だけど、もし受け入れなければならないとしたら、どうなることか……。

今のままでいいと思うが、自国ファーストのエゴそのものだね。朝鮮の正恩の弟殺し。あれも連日のニュースだったけれど、だんだん忘れ去られていく。アメリカと北朝鮮が戦争になりかけている。中国の出方が問題視される中、北朝鮮が

ミサイルを発射したら日本を沈没させる、韓国も焦土となるという物騒な言葉。アメリカと友好国は、つぶしにかかる勢い。孤立する北朝鮮。

本当に今の世界は激動の中にある。殺人や自殺は当たり前前の時代になってしまった。

国内では森友学園問題。あれだけ話題に上るニュースは今まで無かったよ。

自然界では、大地震に津波。超大型台風やハリケーン。

今、私たちは心の世界が、意識の世界が本当だと自覚しなくては……。『意識の流れ』で次の次元に向かっている。

この教えは、本当だと教えられた。早く気付き、母なる田池留吉のエネルギーのもとに帰らないと、このまま、無茶苦茶な激動の世界に取り残されてしまう。意識の転回をはかつて早く帰ろう！

六十八歳の朝、思いを書き綴った。今、学びの友、鈴木さんからメール。ともに帰ろうね……。

（心の旅路） 意識革命から意識の転回へ

「意識の流れ」

平成二年（一九九〇年、十一月）私の意識革命が始まりました。

神仏を礼拝し常識とされる人間社会に、肉的に生きていた私が、他力信仰を手放しひとりで歩き始めました。

母の亡きあと、夫婦の葛藤は日常茶飯事になりました。母にとって代わり夫が君臨したのです。

私にとっては言葉の暴力が嫌でした。「夫婦はお互いの心を見せ合う大切な教材。」そんな言葉は、身にしてみできません。私の前を通過していきます。

夫は悪くないのに、我が家が過去、他力信仰にどっぷりと浸かりきっていた工

ネルギーがそうさせていたことには気づきませんでした。夫は頑固者を演じてきたことを感じます。

苦しみ悩む本人が悪いのです。相手は悪くありません。あなたの心の中に「怒る心」「うらむ心」が、まだこんなにありますよ、と教えてくれる人が、目の前の夫です。

教材を与えてくれているのです。大切な人です。

「そんなわけではない、夫はむちゃくちゃ表と裏のある人なんです。私は悪くないのに、くやしい……。」

結婚してから何度、心の中で、地団駄を踏んだことか。くやしくて眠れなくて、でも、今、わかります。

夫は私にとって、なくてはならない人でした。

全ては、愛の中にありました。

他力の反省、母の反省が足りなかった私です。

母なる田池留吉の愛のエネルギーの中にすつぱりと抱かれている私なのに、なかなかそのことに気づかずにいきました。この世に産んでくださった母はたった一人。人の命の根源はたった一人のお母さんからの賜物なのに、その恩恵は当たり前として素通りしていました。何回も、何回も転生輪廻を繰り返しながら、母の恩を忘れ去って生死を繰り返してきました。その母の数は、はかり知りません。母は、愛のエネルギーであり、田池留吉の意識体そのものでした。そして母から生まれた私は、愛であり、永遠、無限、波動、エネルギーでした。一人の常識とされた慣習からの脱皮。何にも要らない心ひとつで生きて行くことの実践。

大自然の中に生きている自分を感じる心。小鳥のさえずり、木々のささやき、かれんな草花の心がみえるような心のゆとりで生きて行きたい。

ビルの谷間に居て青い空が見えなくなった忙しい人間。文明の発達で人間の脳にとって代わるAI時代。パソコンやスマホなどのIT化。そんな器械なしでは生活できない現代社会。

その現代に大昔から変わらないただ一つのもの……。それは心。愛の心。自分の心の中に存在する田池留吉の愛の心を探し求めて、心の旅が始まりました。今、人類は気付きを促されている。全ては心の世界だと……。

肉體細胞からの思い

「アッ！」一瞬の出来事だった。

棚の上の物を取ろうとして、乗っていた円形の藤の椅子からドンと背中から叩きつけられ衝撃を受けた。

しばらく身動きが取れなかった。でも怪我もしていないようだ。大丈夫だ……。

起きあがれたものの、数か月して右手での歯磨きやテレビのリモコンが操作で

きない。今まで本当に健康で風邪などで寝込むことも無かった私。昨年七月に白内障の手術を受けた。

また少し難聴気味でもある。加齢と共に襲ってくる肉体への変化。

そんな頃、肩の痛みを感じ始めた。右肩の発作が起きると一時間位、痛くて動かせない。息をひそめて耐える。それで昨年九月、病院で受診、レントゲンとMRIから「右肩腱板断裂」二センチ切れていた。注射と薬で治療したが駄目だった。老化からの人もいるらしい。衝撃で断裂した人は痛みを伴うが老化から自然に切れた人は痛みを感じないらしい。そのうちに治まるだろうと思ったがますます発作は治まらない。

痛みと苦しみで「田池留吉」の心は遠のいていく。

「健康な時にこそ、学びをしなくては。体が苦しくなったら、心の余裕がなくなるものだ。それこそ他力で求めてしまう。」苦しい時は、田池留吉に他力の思いますがるので、なかなかが見れない。雑念が多すぎる。

車の運転中、発作が起きると指で指示器をあげるだけの行為が出来ない。一瞬息を止めて指示器を動かす。発作が始まる時は、先に感じるから心づもりはできていた。

二か所の病院を受診。やはり手術しか治せない。二週間の入院とそのあとのリハビリで三カ月位は治療に専念するように勧められた。

手術をしてからが大変。

自分の仕事の調整。家事の調整。犬の散歩、植木の水やり。他、手を使えないことがこんなにも大変だったなんて……。

八月二十五日の手術予定が、私の都合で九月半ばに変更。本当ならすぐにも痛みを取る手術を願うのですが……。ところが数日前、夜中に目覚めた時、私の左手指にはめてある田池先生の指輪が暗がりの中、銀色に光って私の右腕をさすっていた。

「何が悪かったのかなあ」この痛みさえなければ、肩が断裂していてもやって

いけるのに……。その時、ふと思えたのです。

今まで私の田池留吉は間違っていた。もう一度やり直そう。九月七日までに痛みが少しずつ消えていたら手術は中止にしよう。

後は、この心でもう一度、田池留吉と向き合わなくては……。

八キロ離れた病院への送り迎えや後のリハビリ。夫は免許返納したから、誰にも頼れない。三カ月余りも右手が使えないなんて、生きた心地がしないよね。どんなに今の肉体に頼っていたかがわかる。肉体細胞と意識の世界。私は肉どっぶりの生活だったのかわ。

そしてこの言葉が出てきました。

私は意識です。永遠、無限、波動、エネルギーです。

私は愛、あなたも愛、ひとつ。

田池留吉、磁場反転

肉體細胞は私の心に訴えていました。

冷たい私は、肉の世界どっぷりに生きていて、意識をおろそかにしていました。もう一度、やり直します。

九月十五日、明日が手術の予定でした。不思議に心がおろそかになった時、痛みが始まるようです。以前の一日に十五、六回の痛みは二回ほどになりました。手術しか治せないと言われたことを心を見つめてやり直します。

二〇二〇年九月十四日

十月一日、痛みを止めるのに解熱剤のバッファリンを一錠飲んだ。これで、少しは大丈夫かなと思った頃、スポーツジムに血流を改善するという磁気治療器の体験会が始まった。せっかく治り始めてきたと思うので、拒否すると、是非にと勧められた。ところが、時々続けていると、医師から手術しか治らないと言われたのに、

不思議に痛みが止まっている。今日現在十一月十二日、治ったかの様に全てが正常に動く。

体験会は三週間だったけれど、器械は高価だったので、たまたま縁あつて、製造されて二年物をネットオークションで購入した。十一月三日だった。

その後、家に置き、家族はもちろん知人にも使ってもらつて今に至る。これも全ては、田池留吉の縁だと思えてきた。

先日、電車の混んだ車内で扉の真ん中に立っていた。端の人が降りて横が空いたけれど、吊皮を持つて立っていた人がそこに来るだろうと、空けていた。

「端に来ませんか？ 楽ですよ……」とその人に促された。丸坊主でジャンパーを着たヤンキーに見えたその人の波動は、とても優しかった。その後、「ありがとうございました。助かりました。」とお礼を言つて下車した私。その人はマスクの中で微笑んでくれた。

人は見かけで判断しては良くない。人と人との出会い、みんな波動が流れて

いる。本当に何とも言えない安らぎの波動に出会えた時は、うつとり酔いしれる。クッキーとのお散歩のときにも……。

この頃、自然の中で特に優しい波動に酔いしれる。ありがとう。

田池留吉の磁場。この世は不思議な磁場で満たされているのを感じる。ありがとう……。

墓じまい

昨年の七月、町の墓地の売買があり、元の値段で買い上げてくれるという。今までにない通達だった。子供たちに相談し、さっそく墓じまいに取り掛かった。

秀行が亡くなってから、二区画の墓地に先祖の墓石、供養の五輪塔、お地藏さんが並んで建っている。墓相学に詳しい知人のもと、墓地の土を和歌山から



母との思い出が、又、一つ消えた……。

取り寄せた新しい土に入れ替え、五輪塔を建てるときに、家が栄えるようにと金と銀の小判を宝石店から購入してはめ込んだ。

せめてその小判だけでもお墓の形見にと、石碑店に頼んだ。お骨は後日、天王寺に長男と夫と三人で納骨した。これからはこのお寺に納骨されていくように……。

終わりに

この学びに縁を得て、三十年。いろんなことがありました。本当に必要な物だけが残ってきたように思えます。

火山の爆発と崩壊のごとく、お金も消えて行きました。でも自然と整ってきている人生を感じます。

私が生きて行く上で心を見せてくれた家族や友人が、この学びを知るまでに、両親、兄、子供、おじ、おば、そして特に親しかった親友たちが若くして病死、自殺へとどうしてみんな亡くなっていくの？ 私の周りから消えていく寂しさに、打ちひしがれていました。

でもこの田池留吉の学びの道が、私に教えてくれました。寂しさが寂しさと呼び込むと。いつも喜んで楽しんで生きて行くことを教えられました。楽しい喜び



主人とのオーストリア旅行

の波動が、楽しい世界を作っていくのです。それ以来、寂しさは感じなくなりました。心で自分が作り出していく世界だと実感。恐れていた死は私から離れて行きました。身近な人の死は、減っていききました。心って本当に不思議な存在です。また、なぜ夫が家に帰宅したとたんに、私に対しての態度が一変するのか。アマテラスの君臨と全てを牛耳る支配が、我が家にまだまだ残っているのを感じました。伊勢神宮には、宮司さんにお祓いを受け、高下駄に履き替えて、一般参詣の白幕の奥に母と数人の人で厳かに参拝

したこともあります。

毎年大晦日の夜は、伊勢神宮へ恒例で出向きました。家のお床さんには、神宮で買い求めた社が鎮座していました。その隣に家のお仏壇。毎朝、毎晩一日の感謝で祈り続けました。ところが、母の七回忌を最後に三十年前、全て他力信仰から心を開放するために取り払いました。（私が嫁として嫁いだならどうなっていたのか……）血を吐くような、厳しい決断でした。

形は取り払っても、我が家には他力信仰の意識が残り続けていたのです。

母の反省も他力の反省もできていない。

またどうしたら、この難しい夫に愛を流せるのか……。

アマテラスの反省は、母への反省、母が生きているうちにできなかったと後悔しきりですが、母もアマテラスも共に田池留吉の愛の中に帰ることを促します。

それには家族に愛を流していくことが大切なこと。

「整うことを願って反省はダメ。欲を出しての反省はダメ。全てを無にして愛

を流していくと、自然に整っていくのですよ。」

田池先生の言葉が聞こえます。

公園のベンチで寄り添うむつまじい夫婦の姿、妻が乗る車いすを押している夫の姿。その光景を見るたびに寂しくなっていました。私とは買物も食事も行きたがらない。十年前までは、私の誘いにやつとの思いで付いてきてくれたのに……。

自治会などの世話で疲れているよう。まるで昔の亭主閑白です。

ところが、先日からの腕の痛みで洗濯物を干したり、取り入れたりが出来ない為、夫が手伝ってくれました。痛みが来ないときは動かせるのですが……。そして、教室中も夫は扱いにくかった。今までのアシスタンとなら、何も言わなくても私の支えをしてくれていたのに夫は自分の教室のごとく私を使っていた。

指導者は私なの、勝手に子供を帰さないで……。そんな日々が今では、夫と二人三脚。教室の流れがスムーズです。夫も私を立ててくれます。

自転車の整備など、こまごましたことにも動いてくれます。今では、夫なしではやっていけません。本当にありがたく感謝しています。

我が家は、徐々に変わってきているようです。

夫が嫌に思える回数が確かに減ってきているのを感じます。母のお陰でこの世に生を受け、周りの人々に生かせて頂けて七十一歳となりました。

これからは、人工知能が人間にとって代わる世の中、その中でも人間の心は不滅です。心と心が通い合う波動を大切に愛を流して生きて行きたく思います。毎日、毎日、心を見て田池留吉の愛に帰りたいと思うこの頃です。

永遠なる愛に生かされて……。

二〇二〇年十一月十五日

”
幼き御魂よ
やすらかに眠れ
”

(一九八〇年 自費出版した「小さな天使の記録」から抜粋)

「幸福」

幸せは

風にのって 飛んでくる

光にのって やつてくる

暖かい日ざしの輝きは

太陽の贈り物

木の葉のささやきは

やさしい風のプレゼント

そして 子供は神様から授かった大切な宝物

空中に漂うチリがなければ

あの美しい夕焼けはないという

この世に生まれた物は

全て、相互に与え又、与えられる

幸せは、風にのって飛んでくる

手をさしのべて つかみましよう

無我の心で つかみましよう

秀行の生の証

「秀ちゃん！……」ヨチヨチ歩きで得意そうにかけっこしている親子づれを見かけた。いつしか、「ひでゆきッ！」と心の中で叫ぶ。こらえようとしても涙が次から次へと出てきて、去って行きたいという我が子を、心の中で呼び続けている。もう、半月も過ぎたのに、日にちが薬と言われ、だんだん涙も出なくなってきたのに……。やはり、秀行と同じ様な動作をする子を見ると、思い出して悲しくなる。

「秀ちゃん……泣いたらダメよネ。……ママは、泣かない……。秀行は、神様からお借りして、今まで育てさせていただいたものネ。悲しい、さみしいなんてママの我がまま、よくばりよネ。秀行は、ママの心の中にいつまでも生き続け、そして、空からいつも見守っていてくれるものね。」

自分に言い聞かせて、自転車走らせる。

つい二ヶ月前までは、自転車の前に座って、「ヨイシヨ、ヨイシヨ」と、私のかけ声と共に、秀行も「ヨイチヨ、ヨイチヨ」と、小さな腰を浮かせて、大津川の坂を登ったネ。登りきると、「橋（ハシ）よ」「川（カワ）よ」と教えたネ。私が何も言わないと、「カ、カ」と指さした。「そうね、カワね。」と答えてやると、満足そうに大きな川を見渡して、遠くの海を見つめていたネ。

通園バスターミナルまで九ヶ月間、よくこうして二人で、そして時にはお姉ちゃんを後ろに乗せて、走ったネ。――

今、走る自転車の前には、もうかわいかった秀行の姿は無い。走り去って行つた今の親子と、神に召された秀行との思い出が、目の前を交差していった。

生後十八日目で、ダウン症と先天性心臓病を告げられ、奈落の底につき落とされたあの日から四年と一ヶ月。

「私の子供は障害児です。知恵遅れの子供の通園施設『百舌鳥学園』に通っています。神様から授かった大切な宝です。」と、人に言えるまでには、い

ろんな苦しみや、悩み、喜びがありました。それら、いろんな経験を通して、秀行が居るからこそ、私達は明日に生きる原動力を得ていると、感じさせられました。秀行もやっと大地を踏みしめ、自分で一つ一つ珍しい発見をしていき、私達もこれから、秀行への本格的な教育ができると、希望に燃えていた時でした。

兄弟に「秀ちゃん！」と呼ばれて、うれしそうに満足げにスウーッと息が絶える少し前、必死に何かを話そうとしていた秀行。何を言いたかったのでしょうか。……。言葉を語れる人間なら、最後の力をふりしぼって、私に伝えられたでしょう。でも、語れない秀行にとっては、心の声を聴いてやらなくてはならない。亡くなる朝、目でママを追いついて、言いたげにしていたのは、何だったの？ お母さんには、こう聴こえるの。「ボクの死をむだにしないで！ ボクのこの世に生きたアカシを残してネ。お願いネ。ママッ！」って……。分かったわ、秀ちゃん。障害児として生まれながら、幸せだった秀ちゃんとママ達。人になんと思われても、私達にとって素晴らしい宝。その秀行を中心に回っていた家族だったものね。

何万人と悩む、同じ仲間に一筋の希望を、そして、障害者も健常者も同じ人間であり、暖かく支え合う社会が作れるように、その土台の一ケの石にならなくてはネ。

もう泣かない。泣いてはおれないのですもの。

秀行の生の証を残すことが供養になるならと、ペンを走らせます。

一九八〇年三月二十七日

急に秀行が「ア、ア、ア、ア………」と、何かを言い出したのです。

手をにぎってやり、「何？ どうしたの？」と、見守る私。

秀行は涙を一粒、二粒流している。ソツと、拭いてやる。

「悪い心臓ね、早く元気になろうネ。」

あれっ？ 息が途絶えがち。「ア、ア、ア……」すぐ側の徳行に手をにぎらせた。
「秀ちゃん……。」お兄ちゃんの声に嬉しいのか、一しずくのよだれ。

「ホラ、お兄ちゃん！ て、呼び返しているのよ。」

次に、雅代にそうさせると、又、一しずくのよだれ。

「大好きだった、お兄ちゃん、お姉ちゃん、ありがとう。さ・よ・う・な・ら！」
そのまま、スウーッと息を引き取りました。

一しずくのよだれに、言葉をこめて……。

そうして、家族皆の前で、秀行は、神様に召されて行きました。
思い残す事なく、皆にかわいがられ、精一杯、生きてくれた。と信じています。

一九八〇三月十日、午後三時十分……亡。

秀ちゃんへ

かわいかったネ。本当にかわいかった。人が何と言おうと親子だもの。秀行の言いたい事は、皆ママには、わかつていた様な気がする。さみしいのじゃないかな？ つらいのじゃないかな？……と。

亡くなってしまった今、もうだっこしてやれない。甘えて「かわいい、かわいい」と自分からホホを私のホホにすり寄せて……。かわいい手でママの背中をたたく時、ママもキュッと抱きしめて優しく秀行の背中をトントンとたたいてあげたネ。「かわいい、かわいいしてエ」の言葉は、出なくてもママには、心の声がきこえたワ。ある時期、おばあちゃんと寝起きしてたけれど、いつも、ママの横で眠ったものネ。ほとんど、おばあちゃんが、遊び相手だったけれど……。

「てて、てて。」とママの手をさがす。

「おててネ、ハイ。」と布団の下からしつかり握ってやると隣に敷いた、お布団で安心して眠り込んだ秀行。土曜の夜は、皆で布団を並べて眠る日。

お兄ちゃんと、お姉ちゃんの間にサッサと割り込んで行つて、かわいい三つの顔が並んだ時、素朴だけれど本当に幸せを感じたの。随分、夜泣きもして、ママやおばあちゃんやパパを困らしたけれど大好きだった。

また、脳神様にもお参りして頭に冷たい一、二滴のお水を受けたネ。

そして百舌鳥学園へ行くようになってすっかり夜泣きも治つて、ママもよく眠れる様になったワ。

目を覚ますたんびに秀ちゃんが居た。

疲れきつて眠りふと目を覚ますと秀行がいない。はみ出してタタミで眠っている秀行を発見。「秀ちゃん、ごめんネ、ごめんネ。」と冷たくなった手を自分の冷たさも忘れて胸であたためてやり冷たくなった足を両足にはさんで温めてあげた。

それなのに、もう秀行はいない。私の前には、お線香のけむりがユラユラと動

くのみ。笑いかける秀行の写真。何度呼んでももうかわいい返事は返ってこない。

「あまり秀ちゃんを慕ったら成仏できないヨ。」とその言葉を時々思い出す。

秀行にとって、成仏する事が幸せなら、なるべく忘れなくては。天国へ思い残すことなく行つてネ。

ママも力強く生きる。今度、生まれ変わる時が来たら、必ずママ達のもとへ帰つて来てネ。

涙を見せない気の強いお姉ちゃんだけれど、優しさは、人一倍。秀行も感じていたでしょう？ 今も見えるでしょう？ お兄ちゃんとお姉ちゃん、けんかしてさわいばかりいるけれど、秀行の前で、一人しんみり座っている姿が……。大好きだった弟、天国へ行ってしまう弟。

「今、秀ちゃん、どのへん？ 天国へ行けていいナア……。」と屋根のすずめ達と遊び、だんだん空へ登っていっぱいお花畑の続いた天使がたくさん舞っている。昼ばかりのすてきな天国を思い浮かべ、一人先に行ってしまった弟を空想の中で

追いかけている。

「秀ちゃん！ 姿見せてエ！ 秀ちゃん」

と呼んでいるお姉ちゃんの声が聞こえるでしょう？

いつも空から見守っていてネ。

子供は、皆の共有物

神様からさずかった生命

パピースクールでの知育面に入れていただきたいけれど、転居する事もできず、育徳園も遠すぎて、まして未歩行だからと小さなクラスに居ては、成長を望めず、幼稚園までのあと一年、家でしか遊ばせられないのかしら？ と落胆していた三月末のこと、児童相談所から「百舌学園に入れませんか？」の電話連絡。それこ

そ神様からさしのべられた手の様でした。学園の方は、四才からとある人から聞いていましたし幼稚園と同じ年からでは……と（年子の姉と手をつないで通う姿を夢見ていました）。全く考えた事がなかったのです。

それが一年だけでもお世話になりたい……とそうした事が秀行にとって「もずっ子」のまま、神に召されて行きました。いつまでもいつまでも「もずっ子」です。いろんな事を学び、誇りに思える百舌鳥学園でした。

そして秀行も誇りに思える子供です。宝です。

障害児は、「かわいそうな子」「気の毒な子」でしょうか？

いいえ心の美しい純真な、かわいい子供達です。

健全児でありながら、わがままいっぱい、心の醜く育った欲のつっぱった人間こそかわいそうだと思えるのです。親や周りの者がその子達をほめ、かわいがってあげる事によって、育って行くと思うのです。悪い事は悪い。（時には、たたく事によって悪かった事を、体で覚えさせ）良い事は、抱き上げてほめてあげる

事により、少しでも皆と同じ様について行け、まっすぐな心で育つと思います。

一度で聞き入れるわけは、ありません。健常児でさえ何回言っても、子供は、素通りしつつ成長するのですから。何回も何回もその子の為に根気良く。

いつか心と心が通じ合いまっすぐに生きてくれると思います。純真な心を持っているのですもの。

ただ、良い悪いの判断に迷い、つい興味のある方へと進んでいくのだと思います。すべて、神からいただいた生命、肉体。

子供は、皆の宝物、悩んで自殺をして、この世から抜け出たとしても、あの世で幸せにならないでしょう。いつまでもいつまでもそれが気がかりで成仏できず、魂が迷い続ける。そんなつらい日々が続くのです。

人は皆、神（大宇宙自然の力）から生命をいただいているのです。自分で休ませようとしても、動き続ける心臓、肉体は借り物で心だけが自分の物なのです。心は自由に使いこなせます。その心の使い方によって人間の肉体が疲れ、病とな

る日もあるのです。体の使いすぎも病です。

神に恥じない、人間の名にふさわしい心を持ちたいと思います。自我をなくし欲をなくし、そう努力したいと考えます。

宇宙自然現象の中で生まれた健全児も障害児も皆、神の力で生まれてきた平等な人間です。

重度障害児達もその子なりの良さを体の中に、いっぱい秘めていると思うのです。その良さを引っぱり出し、神の力と愛の力によつて、無限の可能性を引っぱり出し「共に生きる、生かされる。」

その姿こそ人間の尊い姿だと思われます。

私は秀行を四才までしか育てていない為に体と心の成長をこれ以上は分かりません。でも、四才までのしつけが「三つ子の魂百まで」と言われる様にこれからの性格や、人間形成へのジャンプ台になると思うです。「秀行は、モザイク型だから可能性がある。」というのではなく、どんな型でも障害児でも両親のしつけや

周りの環境に大いに影響がある事を感じておりました。

秀行と共にすごした四年と一ヶ月。私にとって貴重な歳月であり、秀行にとつては八十年を生きるより短かった四年がいかにも価値ある生き方をして、すばらしい人生を送れたかにあると思うのです。

四才の子供が三百人余りの人々に見守られて葬儀が行われるとは思ってもありませんでした。子供だからと簡素な祭壇でしたのに、秀行にとつてそれこそ幸せに喜んで天国にいけることでしょう。

皆様ありがとうございました。

とくにもずっ子 of 皆さん！

お友達のダウンちゃん達！

お見送りどうもありがとう。

きつときつと秀行は喜んでいることでしょう。

秀行は、ダウン症という障害児でした。

どんな障害児も健常児も

神からさずかった命です。

神からさずかった体です。

体が醜いからといって、心までが醜いでしょうか？

心はとつても純真で美しく

尊い生命を持っています。

目の見えない人が、

心で色や形を見抜く様に

そのやさしい心、すばらしい心を、

健常児に負けない位秘めているのです。

言葉を出せない子は、

心の言葉を持っています。

人が何を言っているか、感じているかを、
心を通して読みとる力をもっているのです。

そのすばらしい心を

成長すると共に

片寄らせてしまうのは、

一体、だれでしょう？

それは、今までの

私達、健常者なのです。

別の世界と意識し又は無視する心が、

その人達の心をも傷つけてしまったのでしょうか。

その人に何も言わなくても

障害者は、心で聴いています。

壁を作っているのは、

私達の無視する、あるいは気の毒に思う
心でした。

ごめんなさい。本当にごめんなさい。

これから歩みましょう。共に……。

同じ人間、皆兄弟ですもの。

秀行は、それを教えたくて

生まれてきたのでは、ないでしょうか。

秀行！ 天国で幸せに幸せに暮らしてネ

御魂よ、やすらかに眠れ……。

一九八〇年四月二日

大きな大宇宙、はかりしれない大宇宙、

そのごく一部のみじんのごとくのこの地球に

重い人生を背負った人間がそれぞれの毎日を忙しく慌ただしく、楽しく、寂しく、送っている。

私のそばから、随分たくさん知人が亡くなって行きました。永遠の別れのつらさも身にしてみています。

生まれては消え、歴史が代わり、人が代わる。

出会いが別れのはじまりのように、別れたた皆さんの人達

今どうしておられるでしょう。なつかしいお友達にも

会ってみたいと思う日々。

私の教室に来る子供達にも、いろんな性格の子がいます。どの子もその子なり

に、良いところをいっぱい秘めている。この子達にも未来があり夢がある。人間やらなくてはいけない時には「やり遂げる力」壁を乗り越え困難をくだいていく「たくましい精神力」そんな物も身につけて欲しい。成績だけでなくもっと大きな物をみつめて……。

秀行を育てた経験を生かし、「思いやり」を持って人に接するよう神から与えられた職業に思えます。

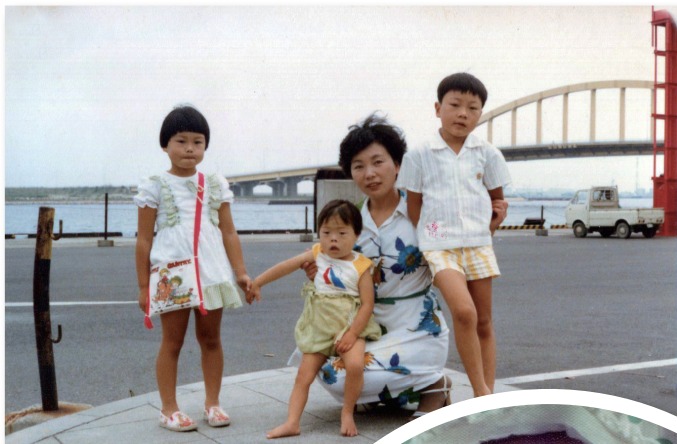
自分の力の範囲内で欲を出さず

神を信じて

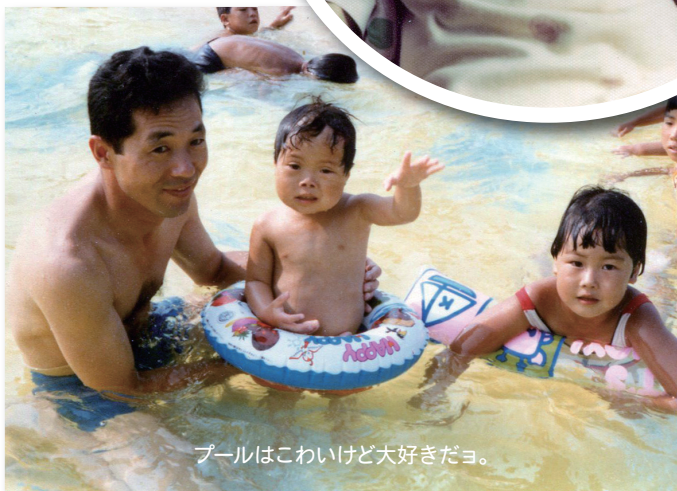
いつまでも、歩きつづけたい。

そう思える今日比頃です。

「小さな天使の記録」完



パパの実家「熊本」からの帰り



プールは可愛いけど大好きだよ。



三人の子育てで母親は大変！



四人とも、おばあちゃんのお手製です。



秋祭り ハッピー姿も勇ましく。

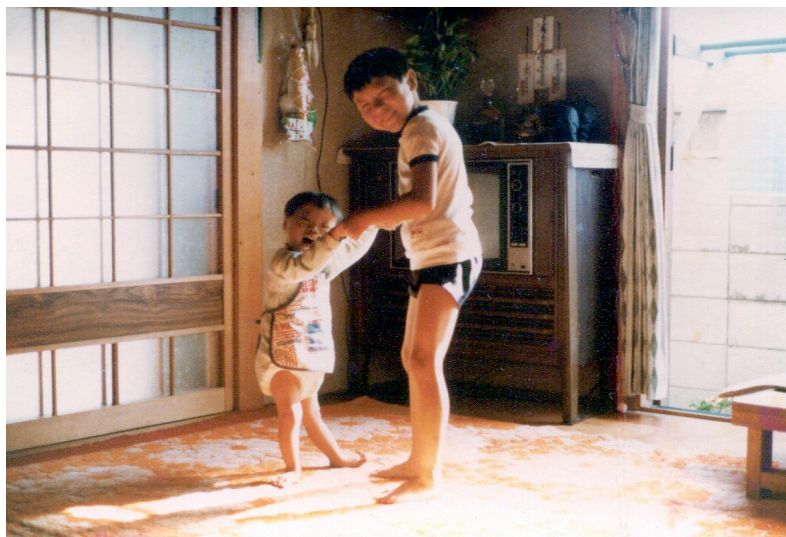


大の仲良し 三人兄弟



七五三のお祝い 三才です。
でもまだ歩けません。





幼稚園から帰るとすぐにあそんでくれるお兄ちゃん。立つちの練習中！



2歳7カ月、ハイハイできるんだよ。



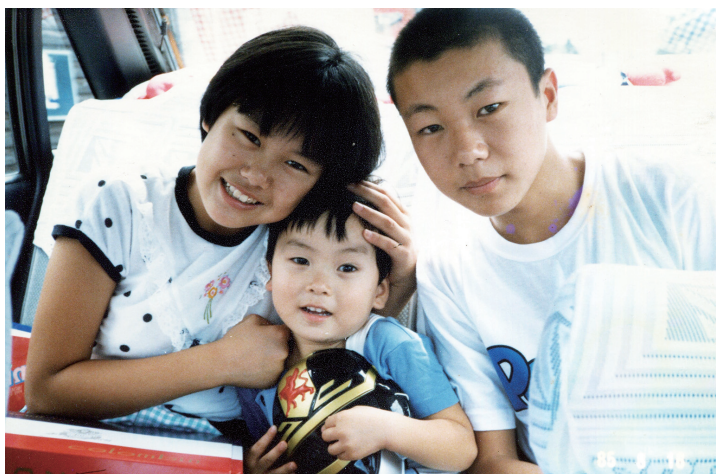
最後の元気な姿、3歳10カ月？ でもちょっぴり疲れたかな！？
「ママ、しんどいヨー」 一人歩きできて、やっと2か月位。

母や子供を亡くして四十年近く、いろいろな人生を歩きつつ子供たちもそれぞれ結婚し、孫も五人になりました。

その後、「東日本大震災」の未曾有の津波による大災害。各地で起こる地震や、御嶽山の噴火。そして二年目に入ったコロナウイルスの変異株の大流行。インドでは毎日三千人以上の死者。日本もドンドン感染者が増えていく。オリンピックどころではない……。

息のできない地球と経済の破たん。医療関係者、学者、識者が何とか打開策をと四苦八苦しているのに反して、自粛疲れを口実に好き勝手にふるまう路上飲み
の若者たち。

先行き不安なこの時代にあっても、家族や教室で学ぶ子供たちと共に、田池留吉の愛のエネルギーに生かされて愛を流しつつ、自己研さんに努めたいと思います。



1985 年 8 月 私の子供 3 人 (亡き秀行に代わっての秀和とともに)



2010 年 お正月 私の孫たち

永遠なる愛に生かされて ― 意識革命と天変地異 ―

2021 年 6 月 10 日発行

著	者	榎木玲子
装	丁	桐生由佳
発	行	編集工房 D E P
		〒 635-0823 奈良県北葛城郡広陵町三吉 345-14
		TEL 0745-55-8525 FAX 0745-55-8440
印	刷・製	本
		モリモト印刷株式会社

ISBN978-4-909201-09-6

© Reiko Horinouchi Printed in Japan 2021